

人材養成
の必要

世界の大事と日本人の覺悟

沃するといふことは我日本民族に取りて必ずしも至難の業ではない。其の成功を圖る爲に予は第一に人材の養成を主張する。予が常に天下の事一も人二も人三も人に在りと聲言して居るのは此の點に留意せるが爲めである。我々は臺灣や滿洲や朝鮮等の拓植經營の成績によつて己に何國にも劣らず、文明政策を實行し得るの能力と信念とを現實に經驗したではないか。只予は本國政府並に一般國民が這般の要義を切實に自覺せず、未だ徹底せる見識に乏しい事を私かに憂慮するものである。

人口の増殖

次には我人口の増殖である。我國の人口増殖が敢て列強の背後に落ちず、世界的膨脹力に富みつゝあるは、吾人の最も意を強うせる所

佛國の産
兒減少

である。見よ佛國の産兒減少は現に如何なる状態にあるかを。彼等は今や其の資本を喰ひ盡さうとして居る。即ち産兒減少は其結果に於て戦慄すべき無形借金經濟に陥らしめた。彼等は過去に残された祖先の資力(資本とは身心の能力をも含む事勿論)に對して恐るべき債務を帯びることゝなつた。蓋し年々産兒の増加を見ざる國民は、當然利殖の事業に投資する事なくして、徒らに財産の消耗を來たすに過ぎないからである。のみならず産兒減少は自ら國民の情氣を招き、國家の進運を阻遏するものである。佛都巴里が數十年にして依然舊態を更めざるは、該地に再遊せるもの、皆齊しく目撃し嘆惜して已まざる事實である。

世界の大事と日本人の覺悟

世界の大勢と日本人の覺悟

佛蘭西の家庭には常に二つの幽霊が徨つて居る。一つは小兒の出産を恐るゝこと、他は有害なる生命保険の思想である（搖籃の中より保險をなす習慣）之が爲に佛國民は青年の時代より早くも活動の元氣を失ひ、努力奮闘の精神を消磨し、滔々として奢侈淫逸の惡風に浸染し彼等自ら發育の芽を枯らして居るのである。即ち知る。人口減少は單に國民の數量的縮少を來すに止まらず、精神的に國民を腐敗せしめ向上發展の元氣を阻喪せしめて、遂に滅亡の悲運に誘ふものなるを。斯くして佛國民は漸次劣弱に傾き、獨力を以ては到底獨逸に對抗し得ざることを自覺するに至り、止むなく久しき以前より英國指導の下に排獨協商聯合の一分子となり辛うじて其の餘喘を保ち、其均勢を支

持するの有様となつた。人口減少の慘害と流毒とは以上の例に見るも極めて明ではないか。

然るに近來我國の論者中、往々生活難救濟の一法として人口制限を説き、避妊を是認すべしなど説く者あるは、區々たる眼前の小計に惱惑して、天下の大勢を達觀するの明なき近眼者流の囁語である。生活難救濟は別に方法あり、人口の制限に依りて國民の生活を容易ならしめんとするが如きは、膠柱彈琴の徒が無爲姑息の非募債主義を唱ふると同様、消極的退嬰的の亡國思想である。若し人口過剩を患ふべしとせば、何ぞ進んで世界的植民政策の爲に奮勵せざる、何ぞ積極的に世界的膨脹を試みるの雄圖に努力せざる。我日本民族は斷じて此の種

世界の大勢と日本人の覺悟

愚論に耳を傾けてならない。

我々日本民族は本來の生々發展主義を失つてはならない。益々膨脹し、益々健闘邁進するの元氣を出さなければならぬ。而してこれが爲めには日に新に、日々に新なるべく、常に新らしき思想と新らしき言論とに心耳を澄まして居なければならぬ。併し乍ら何等の自覺もなく只漫然として新奇を追求め、舊思想、舊日本を呪ふが如きは決して着實なる態度とはいへない。舊きもの、中には已に生命を有せざる死灰もあらう。されど舊くして而も永遠に新なるものが無いとも言へない。殊に建國の始めより不滅の光輝を放てる民族固有の大精神、何千年來の風霜を経て鍛鍊し琢磨せられたる歴史の結晶、そは到底物質的

大國民の資格

文明の爲に評價さるべきものではない。其等は實に淺薄なる理智の境を超越したる偉大なる生命其物の範圍に屬して居る。此故に傳説を侮蔑し、歴史を没却する國民は、自己生命の根幹に斧を加ふるものであつて、未來の發展力を有せざる自暴自棄の徒である。

國廣く民多きのみが必ずしも大國民たるの資格ではない。苟も大國民たらんとするもの、襟度は、日月を吞吐する底の旺盛なる元氣に満ち満ちて居なければならぬ。而して此の如き元氣は、國民の人口を計上して得らるべき數字以上の或るものであらねばならぬ。過去幾千年間の一切の生靈の合奏樂であらねばならぬ。

顧みて我國の人口に就て觀るに、明治元年には二千五萬人即ち朝

鮮現在人口の倍數に充たなかつたが、今日は約八千萬人の多數に上つて居る。其の新版圖に屬するものを除き、純粹の母國人のみを擧ぐるも實に五千五百萬人を算し、且つ年々の人口増加數は五十萬人を下らない。假りに明治元年を二千五百萬人とし、同四十五年を五千萬人として推算すれば、明治元年より同四十五年迄の人口を累計したる總數は實に十六億八千九百二十一萬人即ち約十七億人の多きに達する。更に同様の計算を遡及せしめて、神代より今日に至るまでの人口の累計を求むとすれば、其數の絶大なる、眞に吾人の想像を越え、只簡單に無數といふの外はない。現在の我國民的精神は實に此の無數の生靈の結晶である。而して此の無數の生靈の中核であり更に之を超越せる一

明治天皇

大神靈は、畏くも中興の英主にまします明治天皇の御英魂である。明治天皇こそは實に開國以來の億兆の靈氣を御一身に體現せられたる超人であり人間神である。これ洵に大和民族の絶巔に立てる燈明臺であつて、其の靈光は我々七千五百萬の同胞を照し、新版圖の生民を照し、やがて世界の萬民を照すべき無限絶大燭光である。而して大日本主義とは此の無限絶大燭光其物の異名である。羅馬舊教式の形式的、他律的專制主義を繼承せるルイ十四世は『朕は國家なり』と揚言したが、併し彼は佛國一流の專制的強壓者たるに過ぎなかつた。我が天皇に於てのみ眞の意味に於て斯く宣言し給ふべき御資格を有たせらるゝのではないか。

我々日本國民は此の無限絶大燭光の輝きをして、地球上至らぬ限なく照耀せしむるに至つて始めて永世無窮の神靈に護られつゝ現代に濶歩するの權利を是認せらるゝのである。

植民政策に對する予の態度

上來予は十有三章を累ねて先づ近代文化の二大潮流たる民族主義と世界主義とに就いて其梗概を叙し、次で民族主義の意義、性質、趨勢を説くと同時に、世界に是ける民族競争の現狀に及び且歴史上に於ける物心二派の傾向を略述し、進んで日本民族の偉大性を闡明し、又併せて我國民の民族的自覺を要求し、かくて日本民族膨脹の方針と覺悟とを論述した。勿論、限りある紙數に拘束されつゝ史學、社會學、生物學及び國民哲學の諸方面に亘れる重大問題を取扱つたのであるから

植民政策
に對する
態度

植民政策に對する予の態度

總て未だ精を盡さざるの憾なしとせざれど、日本民族膨脹の切實緊要なる理由を明かにし、その輪廓的知識を一般讀者に提供せんとする予の企ては略々其目的を達し得たと思ふ。而もこゝに筆を措くに際して尙是非とも數言を費さざるを得ざる或物が残つてゐる。或物とは何ぞ、予が植民政策に對する態度である。用意である。理想である。予は本書に於て日本民族膨脹の根本概念を、専ら人文哲學乃至開化史の側より立論するに心を用ひ、且常に生物學的觀念を採み、能ふ限り國民生活の核心に觸るゝを主としたるに對し、世人或は政治學上より之を攻究するの勞を執らざりしを疑問に附すべしと雖も、これは實は予が他の帝國主義者若くは植民政策に關する時事問題の研究を以て主

新植民政
策

文明政策

植民政策に對する予の態度

眼とする人々と大に其志を異にするが故である。一般に植民政策とし言へば其言葉それ自身が既に一種の政略的意味を含み其背景には何等か辛辣危險の分子を藏するやの嫌なき能はざるを以て、輒近進歩せる學者間には新植民政策なる語が漸次勢を得て識者の歡迎を受くるやうになつて來た。併しながら所謂新植民政策なる言葉にも尙傳襲的觀念の附着せるあるが爲め、未だ其の内容を適切に言ひ現はせるものといふことが出來ぬ。此故に予は更に之を改めて、更に文明政策と名を用ふるの寧ろ妥當なるを信するのである。これ予が日本膨脹論の第一義を民族の精神的發展に置き、之を基本とし、主調とし、骨子として本書を編述せる所以である。

民族發展の根本要諦

植民政策に對する予の態度

一八八

抑も民族發展の根本要諦は民族固有の精神的内容、中心的理想、それを標示する國粹の發揮を外にして他に之を求むることは出来ない。國家の盛衰は畢竟國粹の消長如何に依つて定まるのであつて、他は悉く第二義以下の條件たるに過ぎぬ。換言すれば日本を大にするの主義と、日本を小にするの主義、即ち大日本主義と小日本主義の分岐點は從來の所謂植民政策を執るか、將た予の所謂文化政策に重きを置くかに歸着するのである。前者は器械的、武斷的膨脹に傾き、後者は有機的、文化的膨脹を主とする。是新植民政策と舊植民政策、乃至は舊帝國主義と新帝國主義との差異點にして、共に大日本主義を目的とするものたりとも、おのづから其方嚮、手段、理想を異にせざるを得ない。

有機的膨脹

然らば民族、國家の有機的膨脹とは何か。こは既に上來予が屢々解説を試みたるが如く、要するに各個體を全體の統一中に獨立すること、を容認して發育伸張せしむるの統制である。即ち大宇宙を小宇宙の中に包み、小宇宙が大宇宙の中に生存し發展するの主義である。例へば獨逸の國粹がクザーネル、ライブニッツ、カント、フイヒテ、ヘーゲル、シエリング、シヨーベンハウエル等の哲學者達に依て繼承し、培養し、開發されて現時の優秀なる民族精神を煥發し來つたるが如く、大國民たるの理想を啓沃し體現するには、哲人偉傑互に戮力協心して新世界開化主義の爲に努力獎勵して彼が如きの強大を成し得たのである。そはライブニッツが哲學者にして同時に普國の外交官たりしこと、

植民政策に對する予の態度

一八九

植民政策に對する予の態度
或は普國王をして學士會院を興さしめ、以て普國精神の啓蒙開拓に盡
瘁せる事、フリードリツヒ大王がヴォルやカント等の著書に深厚なる
敬意を捧けたること、フリードリツヒ、ウイルヘルム三世が普國の國
步艱難の秋に際して柏林大學を建設せしめ、愛國哲學者フイヒテをし
て大に其氣焰を揚げしめた事、普國の爲政治家達が敬虔なる態度を以て
フイヒテやヘーゲルの所説に傾聽した事等を顧るならば實に思ひ半ば
に過ぐるものがあるであらう。

多くの政治家は思想の勝利文化の征服を藐視し蔑如して哲理は活社
會に用なき死學なるかの如く誤解してゐる。然るに其所謂死學が獨逸
に在ては前述の如く烈々たる炎となりて彼等の胸に燃えてゐるではな

いか、夫のトライチケを祖述したるベルンハルディーの軍國主義のみ
を知りて獨逸の國民哲學が如何に彼等を力づけつゝあるかを理解せざ
るものは、寧ろ嗤ふべき短視の徒といはねばならぬ。嘗に獨逸に於て
のみならず、希臘に於ても羅馬に於ても又佛蘭西や英吉利に於ても、
或は又往時の支那に於ても哲學乃至思想と實際政治との間には常に離
るべからざる密接の關係を保つて居た、然るに建國以來幾千年の歴史
を有する我日本に限つて何が故に哲學は死せる學問なりや。徳川幕府
の政策が朱子學の精神に負ふところ深く、王政維新の興業が水戸學の
感化に負ふところ大なるは苟も史眼あるもの、直に首肯し得るところ
ではないか。此故に予は年來、學俗接近の必要を唱へ、常に總ての間

植民政策に對する予の態度

題に於て俗事に對して學術的精神の徹底せんことを望みつゝあるは蓋し茲に鑑みる所あるが爲めである。

されば予は日本民族の膨脹を論ずるに當りても、世に所謂植民政策を鼓吹するよりも、先づ民族固有の大精神を闡明し活躍せしむることを以て急務となすものである。而して此大精神を如何にして發揚し顯現せしむべきかと云へば、予が大和民族本來の理想及特絶性として擧示したる、偉大なる消化力、同化力、發展力、神秘の現實化、生々主義、文化的、思想的征服主義を飽迄發揮することの外にはない。

獨逸のシヨヴィニストとして目せられたるフイヒテは、獨逸民族の使命を論じて次の如く言つて居る。曰く、

『苟も靈性及靈性の自由を信じ、且自由に依りて靈性の永久的發展を求むるものは、其何處に生れ、將た何れの國語を使用すればとて我々と性を同うするものである。而して創造的に生存し、眞實本然の生存を何處に向くべきかに注意し又は少くとも靈性の自由を感じする人々は本來的の人間である。そは乃ち獨逸人である』

と、其意頗る深遠なるが如しと雖も、彼が言はんと欲せし所は人類の器械的的外部的生存を排して、有機的内部的生存を主張したるに外ならぬ。これぞ予が日本民族膨脹の第一義を文化的思想的方面より高調せると相匹似し、大に予の意を得たる點である。

又獨逸人ラガルデは一層力強く予が懷抱に酷似せる意見を主張して植民政策に對する予の態度

居る。曰く、

『獨逸人の獨逸人たる意義はゲミユート（情誼又は情合の義、獨人は他國に譯語なしと自負す）に在り、血液其ものに存せず。』

と。これ實に獨逸人としては最も放膽熱烈なる豫言者の口吻である。彼は獨逸の國粹を世の狹量なる愛國主義者の如く血液と土地とに結び附けずして、精神的道義的なる國粹觀念に求めて、世界の文化的征服を唱道したのである、民族精神の世界的發現を確信する者は必ず此點に迄徹底しなければならぬ。固より土地と血液とは國粹を擁護し發展せしむべき重大要件であるが、單にそのみには民族膨脹の根本義を得たるものとは云へない。より自由なる靈性、より大々的に迸出す

實大乘主義

る潑刺たる精神的光輝こそ、眞の國粹といはねばならぬ。換言すれば國粹の物質的拘束は小乘的である。血液と土地とに依つて民族の膨脹を力説する舊き植民政策は即ちそれである。國粹の靈化と無限大とを主調とする文化的政策は即ち物心一如の實大乘主義である。此故に予は飽く迄も大乘主義の民族膨脹論を眼目とし、この趣旨に基きて本書を世に問ふに至つたのである。若し夫れ政治學上より觀たる膨脹論は他日機を得て之を公にするの時があらう。

以上に於て此の書の本論は一先づ大團圓を告げたのである。併し予が日本民族の膨脹に於て抱持せる意見は之に盡きたのではない。予は更に國家生理學及國家病理學上より論究すべき幾多の問題を保留して

小日本主義の宿弊

重患の一

植民政策に對する予の態度
一九六
るが、唯茲には本書の餘論又は補論として我民族發展の障礙たる重患、即ち小日本主義の宿弊と認むべき三四の痼疾を簡單に指摘して我國民の反省を促して置く。

協同的研究及び調査の力の貧弱なること、是れ重患の一である。同一の事業に對してすら各々別々の態度を取り、時としては相互の間に種々の扞格を來たすことがあり、さなきだに、力を個々に分離し、其の結果に於て常に非常なる不利益、不經濟を極めてゐる。

重患の二

事業繼續の力に乏しきこと、これ重患の二である。由來邦人の惡癖として公共の事業の繼續力を缺き大損を來すもの少なからず、夫の北海道拓植事業の如きも其一例であつて、切角或種の大事業を計畫し乍

ら一朝些細の支障若くは偶然の災厄に遭逢するるとき、忽ち氣力を喪失して事業の蹉跌を招き、能く最後の功を完くするものがない。又幸ひに順境に立ちて其事業に成功する時は、復び他の新事業に心を移し或は種々雑多の方面に手を伸ばし終始一貫の操守なく耐久性なく主一的熱誠がない。即ち事業に對して甚だ浮氣である。

重患の三

所謂文明病の毒風近來我國に浸染して剛健なる發展の鬪志及活力の減退せる兆あること、これ重患の三である。其病毒の膏肓に入るや徒らに神經過敏となり、臆病風に囚はれてひたすら無事を求め、儉安姑息の弊に墮ち、冒險的思想や敢爲の氣象が日に々衰耗する。而して其の結果は英雄思想の缺乏を來し、君子危きに近寄らず底の消極的

植民政策に對する予の態度

警戒性のみが機敏に働き、蝸牛的、窒息的、閉門的な凡俗主義、小人思想が時を得顔に跋扈する。斯くて小さかき人間、猛進的膽略を去勢されたる婦女子の神經病者の増加するは、國民發展の上より見て眞に憂慮に堪へざる傾向である。

主として世紀末のデカダン思想に感染し、無責任なるコスモポリタン主義に雷同し、遠心的傾向を趁ひて、民族的求心的傾向の反比例的に弛解しつゝあること、これ重患の四である。即ち一般に世界主義的傾向又は非國民的惡弊に追隨し、自國の歴史及傳統を呪咀するが如き無自覺の病態が我國現下の思想界に蔓延せんとしてゐる。而も此病態たるや決して雄大なる世界的精神、人道的理想に根據をおくものにあ

重患の四

らずして、寧ろ國民としての責任を遁避し總ての義務觀念を撥無せんとする放肆自恣の利己的主義思想に驅られ、我から心旨の徒となつて居るのである。世の所謂『新らしや』連に殊に此種の輩多し、此れ最も禍ひの大なるものである。

重患の五

諸外國との協同經營、就中支那及び露國との精神的並に政策的結合未だ充分に緊密ならず、常に列國の歩趨に後れ、若くは他の意向に迎合し旨従して日本民族の地位を孤立不安の境遇に放置しつゝあることこれ重患の五である。こは日本民族の發展上、最も直接的打撃を與ふるものにして今後我國の世界政策を進捗せしむるに當り、深大の困難を感じざるを得ない。戦前に於ける獨逸人の對露活動が専ら兩國國民の

協同經營に依て支持され、其根柢の意外に強靱なるは夙に識者の洞觀せる所である。然るに我が國が單に英國の要求なりと稱し、其實當時英國は我提案を好まざりしに係らず直ちに對獨宣戰の輕舉に出で、或は戰後の國際關係に思慮を運ばずして無策無謀の對支交渉を行ひ、終に最後通牒を發して漸く局面を糊塗したるが如き、其責や斷じて輕しと言へない。假令對獨宣戰の必要を認めたるにもせよ、若し我當局にして多少の深慮ありしならば、先づ徐ろに獨逸の反省を求め、戰禍の東洋に波及せざらんことを勸告し、而して尙且戰局の範圍を歐洲の天地に局限すること能はざるに至つて、我國の態度を決定するも敢て其の遲きを憂としなかつたのである。此の如く外交上の折衝に周密なる

手段を盡しつゝ、全力を舉げて戰時禁制品を購入し、一切の準備を整備し充實して萬遺漏なきに及んで宣戰を布告せんか、啻に戰爭の長期に亘るを苦痛とせざるのみならず、其蓄積せる軍需品の供給力を以て同盟國乃至聯合軍の不時の要求に應じ得るの利益と便利とを收め、敵味方をして共に其の用意の細心精緻なるに敬服せしめ、併せて他の反感を緩和し得たるを疑はない。我當局の不明にして自主的經綸なき、概ね此類である。これ我外交に權威なく遠見なく信を海外に失ふ所以眞に憂患の極みではないか。

この他我國民の重患を列舉し來れば殆ど數限りがない。淺薄なる黨派政治を模倣し、國民性を異にせる他邦の政治組織に眩惑して却て慘

烈なる黨禍の爲に悩みつゝあるが如き、世界空前の大事變を眼前に眺めながら、漫然手を拱きて傍觀し何等之に對する施設なく、紛々擾々内争に日を消して千載一遇の好機を逸しつゝあるが如き、偏狹なる感情の俘虜となりて寛宏の襟度なく、淡如たる雅量なく、高邁の識見なく、島國的根性を脱せざるが如き、孰れも皆大國民たるの素質を破り、建國の大義に背き、民族固有の精神を汚損するの重患と云はねばならぬ。この痼疾を芟滅し、此病態を根治する方法如何。之が病理學的對症療法は他日に委せん。請ふ須らく日本膨脹の根本義を自覺せよ。而して優秀なる大和民族の大精神と、世界的開化主義即ち文化的政策の眞意義とを理解し、證悟し、體得せよ。

南洲と太閤と那翁

大ナボレ
オシ

大ナボレオンは稀世の英傑である。軍事は勿論政治外交財政の方面に於ても、非常に卓出せる見地を有して居つた。が、人格の上には賞讃、尊敬すべき幾多の美點を具ふると同時に、亦大に非難すべき點があつた。然るに彼の歿後約百年の今日に至るまで、佛蘭西中には殆んど彼に對して悪口すら云ふものがない。否寧ろ全佛人の非常なる尊敬を受けつゝある。この一事は、最もよくナボレオンの人物を説明するものであつて、予の常に感服措く能はざる所である。見よ、我西

郷南洲は、薩摩の子弟を悉く殺したではないか。然るに薩人の中一人として、南洲に對して悪口を云ふものもなければ、又怨んで居る者もないのは、世人の等しく目撃する所であらう。一面から見れば、佛蘭西はナポレオンの爲めに蹂躪されたのである。彼がエルバ島に流された時には、先王ルイ十六世は、復立の爲めに英國から歸つて来て、歡聲湧くが如き裡にパリーの宮城に入られたのである。一時はこんな状態に立ち到つた事もあるが、其後百年を経過せる今日まで、佛蘭西人中には、ナポレオンを非難する者の極めて少ないのみならず、寧ろ彼を謳歌し敬慕しつゝあるのである。此點はよく南洲と似て居ると言つても良からうと思ふ。けれども南洲は徳の人であつて、才能材幹の左

程著しく傑出した人では無い、——人の尊信崇拜を受けるに、最もよき素質を有した、いはゞ高德の人であつた。ナポレオンの性質は全く之れと反對して、才能材幹は著しく傑出してゐるが、決して徳のみの高い人ではない。抑も、多數の人の有して居る徳、所謂徳望家、人望家などは、いはゞ自然に生れ付いたる徳である。即ち人望家たり徳望家たるべき素質を、先天的に具備して居るのである。若し信長のやうな性質で、人望天下に普き人があつたら、それこそ、最も稀世の人物といはねばならぬ。ナポレオンは即ち其の人である。然も今日猶依然として國民の敬迎を受けつゝあるのは、決して尋常一様の所謂「徳の有る人」の受けつゝある尊敬とは、日を同じうして語ることが出来

ない。これは予の歐洲留學中から、常に感じて居た所である。
 嘗て予の露西亞に行つた時に、ナポレオンが露に對して、あれだけのことをやつたに拘はらず、露西亞人もナポレオンを甚だしく怨んだり、侮蔑したりして居らぬのを目撃して、實に異様に感じたことがあ
 る。ナポレオンは歐洲全部を敵手とし、殊に英吉利に對しては、徹頭徹尾其反對を受けて非常に憤怒し、どうにかして之を征服しようとしたが、遂に出來得なかつたのみならず、最初は英吉利に降るに至つたのだが、嘗て大陸條例を發して、英國を商業上から困憊せしめんと畫策せし時なども、歐洲大陸中で最も適切に苦痛困難を感じたのは露西亞である。又ナポレオンが、前皇后ヨセフインを離婚して、奧太

利の皇女ミリア、ルイザと結婚する前に、露西亞と婚を結ばんことを希望して、皇帝アレキサンダー一世に拒絶されたこともある。ナポレオンが約五十萬の大兵を率ゐて、露西亞を征伐するに至つたのも是等に原因するとすら傳へられて居る。而して露人自ら放ちし愛國の火と其特有の積雪とに懷されて、一敗地に塗れたナポレオンは茲に全盛期を劃して漸く衰運の兆を萌した。斯くナポレオンの爲めに苦しみ、又斯くの如くナポレオンを苦しませた露西亞人も、今日では餘り深くナポレオンを憎んだり、怨んだりしてはゐない。否、寧ろナポレオンを撃退したのを以て、非常な名譽として居る。是は全くナポレオンが偉らいからではあるまいか。尤もモスコイの大火に就ては、是までモス

コーの總督が故國の爲め、囚徒を放つて全市を焼かした様に、一般に信ぜられて居るが、近來の研究に依るとそれは全く間違で、火事は自然に起つたもので、決して特に策略上放火せしめたものでないといふことだ。話が少し横道に入るが、かゝる説が何故起つたかといふに、全くナポレオンの失敗の大なる丈に、それ丈露西亞の功名が大なる譯で、つまり露西亞の功を賞讃する意味からして、さも妙計奇策を廻らしたかの如く、他からしてこんな事を捏造し吹聴したものであるとも傳へらるゝので、露國でも其當時は之を打消して居つたが、一寸考へて見ると、斯く吹聴する方が自國の爲めにも利益であるので、たうとう一般にかくいひ觸らさるゝ事になつたのだと云ふ。我國でも元

寇には大部荒されたが、天祐と相俟つて、遂に之を撃退した、此の時本統に戦つたら、果して勝敗はどうあつたらうか。一寸危い次第である。併も此の撃退を非常の名譽として誇つて居る。之れ當時の人が、實際偉かつたからで、世界を蹂躪した餘威をかつて送り來た巨萬の大兵を撃破したのは、實際天與の次第であるが、我の名譽の大なる丈に、それ丈に元の強かりし事を證據立て得るものともいつてよい。露西亞のナポレオンを撃退したのを名譽と考へるのも、亦同一の推理から判断する事が出来る。否寧ろそれ以上の理由があるのだ。之を以て見てもナポレオンが當時の露國に憚られた事と、彼の非常に豪かつたことが知れる。

豊太閣

南洲と太閣と那翁

徳望に就て、南洲とナポレオンとを比較したが、一般の上から論じたならば我豊太閣なども同じく不世出の英傑として、ナポレオンと比較すべきものであらう。併し惜しい哉太閣は東洋的たるを免れなかつた。よく大要を括つて全體を動かして行く所は、太閣の太閣たる所以であるが、立法的の事業、行政上の才幹等細目に亘る點に於て、ナポレオンに及ばない所があるやうに思はれる。要するに卓抜の士、不世出の豪傑は、一大長所があると同時に、他面に大なる缺點がある。故に小人孺子と雖も攻撃を試みようと思へば、いくらでも穴はある、人至愚なりと雖も、他人を攻むるに聰明なりで、如何に大人物でも、小人の爲めには、非難すべき點を発見されるから、此點に就ては、大に

大豪傑たる所以

注意を拂はねばなるまいと思ふ。

終りに臨んで一言したいことがある。大人物には必ず大缺點のあることは前述の通りであるが、之を自ら蔽はないのが、即ち大豪傑の大豪傑たる所以である。之が破れて來た時に、之を巧に處理して行くのがえらいのである。豫め之を蔽はんとするのは、大人物の爲さざる所で、大人物と小人物との差違はこんなところにも見ゆるのである。猶此の外戦争の事蹟から、ナポレオンに就て言ふべきことが多くあれども、夫れは他の専門家に譲ることゝしよう。たゞ予は、青年が大豪傑の傳記を讀むに當つて、自分の頭で淺薄なる解釋を下し、徒らに膽の大なるを眞似て、心の小なるを逸するやうなことの無いのを望むの

南洲と太閣と那翁

だ。ナポレオンに就ても然りである。彼の長所と同時に、彼の短所をも辨へる事が最も必要であると思ふ。

福澤先生の追想

福澤先生
との
初対
面

噫、もう先生の十回忌にもなるのかね、宛然夢のやうだ。吾輩が初めて先生に對面したのは、明治十六年の事で、これも故人となつた長與專齋翁の宅で紹介されたのである。其頃吾輩は衛生局に勤めて居たので、長與翁とは別懇の間柄であつた。福澤翁と長與翁との交際は既に世人の知つて居る通りであるが、此時は只だ私交上の面談に過ぎなかつたので、其後、明治二十三年に至り、吾輩は初めて公務を帯びて先生と會見したのである。

福澤先生の追想
吾輩が改めて先生に對面したのは、北里博士の傳染病研究所設立に關する用談を帯びてであつた。其後吾輩は幾度か親しく先生と談論するの機會を得たが、其都度先生の偉大なる人格に觸れて、尊敬の念を深くするに至つた。今、先生の十周年に際して、茲に尊敬せる故人の面影を語る事は吾輩の光榮である。

福澤先生は非常に科學といふものを重視した。誰のいふことでも、其人の頭から出た事で、それが西洋の思想、即ち科學と合つて居れば必ず其れを採用された。即ち先生は、社會を此實質なる科學によつて導かうとなさつたのだ。
其處で、進歩せる文明の思想を、猶幼稚なる日本の社會に普及させ

ようが爲めには、随分激しい、極端と思はれる議論もした。であるから、一般世人の想像に上つた先生は、随分喧しい、狂熱的な人のやうでもあるが、實際面會して見ると、ナカ／＼溫厚篤實な君子人であつた。そして一個の立派な學者であつた。學者にして學者振らない處に實に先生の特徴はあつたのである。

其頃、世に學者といふ看板を掲げて居ながら、福澤先生の足許にも寄り付けぬ學者が多かつたのである。先生は常に平易なる文字を以て、高尚なる學理を説く事に努めて居られたので、世俗は實際に學者としての、先生の蘊蓄を知り得なかつたやうであるが、先生の學問は、ナカ／＼世間普通の學者が三舍を避ける程のものであつた。但し或る

専門の事物に就て、何處までも深く究めて行くといふ風の學者ではなかつた。兎に角其造詣する所の廣く深かつた事は、吾輩の今猶ほ驚嘆措く能はざる所である。

斯の如く福澤先生は一個堂々たる學者であつたが、常に念頭から世俗といふものを離さなかつた。先生は何處までも、學問の獨占といふことに反對して、文明の恩澤を一般世俗の上にも行きわたらせようとして、努力奮闘せられたのである。是は今日より見て、非常なる卓見といはなければならぬ。

即ち、世間一般の學者はやゝもすると、世俗のことを顧みないのを以て、却て得意とする風がある。けれども先生は決して世俗のことを

世俗を離れず

大常識家

忘れなかつた。如何にしても學問の光、文明の恩澤を、一般社會にまでも、行きわたらせようと苦心したのである。他の所謂學者と、些か選を異にして居るやうに思はれる。

要するに、先生は一面立派な學者であつたと共に、又一面大なる常識家であつた。學問と常識との調和、之が他に求めて得られざる先生の特色である。先生が學者にして學者に非ず、村夫子にして村夫子に非ざる所は、此邊にあつて存したのだと予は信ずる。

又福澤先生は、理智と感情との圓滿調和された人であつた。成る程、先生は理智の人か、感情の人かと云へば、理智に傾いて居た人であつたに相違ない。先生の一言一行は皆理智の鏡に照らされたものである。

理智一遍
の人に非

福澤先生の追想

三八

つたけれども、先生は決して理智一遍の人ではなかつた。先生は彼の
理智一遍の人が、ヤ、もすると陥り易い、無情冷酷の譏を被るやうな
人ではなかつた。理智の下に温い感情が潜んで居て、心の奥には充分
に血もあり、涙もあつた人である。

處が、先生は何事かをやらうと定めておきながら、屢々其豫定を變
更したことがある。之が爲め、一部の人からは意志の薄弱な人として
誤解された傾きもある。然しながら吾輩を以て見ると、先生は決して
意志の弱い人ではなかつた。或る點に於ては、立派な勇者としての資
格を持つた人であつた。

然らば先生は何が故に屢々其豫定を變更したかといふに、之は先生

先が見え
過ぎた

理解力

があまりに先が見え過ぎたからである。感情よりも理智が冴え過ぎて
居たからである。其處で、先生は種々に立場を變へて事物を観察した。
従つて先が見え過ぎたのである。決して意志の弱い人でなかつたのみ
ならず、西洋文明の輸入、科學の普及といふ目的に就ては、終始一貫
して渝る所が無かつた。此一種の改革事業に對して、先生は實に鐵の
如き堅固なる意志を抱いて居たのである。

次に驚くべきは福澤先生の理解力である。苟も、其話が合理的の事
である以上十のものを三つまでいへば、先生は全體を了解して仕舞つ
た。さうして、ドシ／＼質問を試る、その質問が、又何うしても全體
を聞いて、スツカリ了解して仕舞つた人でなくては出来ない質問であ

福澤先生の追想

三九

消化力

福澤先生の追想

る。兎に角、驚く可き理解力を持つて居た人である。それから稱すべきは、先生の消化力である。先生は斯の如き鋭敏なる理解力を以て、人の云ふ理窟を噛み分けたと同時に、それを消化して巧に自分のものにした、如何に理窟を咀嚼し得ても、それを他人のものとして存するなら、何の役にも立たないが、先生は、直ちにそれを消化して自分のものとした。さうして一段高尚な、上品なものにしたのである。

明治十六年の頃、社會に例の賣藥論がやかましかつた當時、吾輩は先生に會つて此の問題に對する卑見を述べたことがある。先生の賣藥論の社會に發表されたのは、其後の事である。吾輩は先生の消化力の

大なるに驚いた。明治二十一年頃から、二十五六年にかけて『時事新報』の紙上に掲載され、世間の注意を惹いた先生の論說の中で、先生が吾輩の說にヒントを得たと思ふやうな說が大分あつた。併もそれが、全然新しい說となつて、飽くまでも先生の面目を發揮して居るのである。茲に於てか吾輩は、先生の消化力の偉大なるに驚かざるを得なかつたのである。

先生が、早くも時代の趨勢を達観して商工立國論を唱へたのは、實に驚く可き卓見といはねばならぬ。思ふに當時の社會にはまだ封建時代の感情があつて、學者、文人を重んじ商工業者を輕んずるといふ風があつた。併も此風潮に卒先して、日本の將來は、商工業を以て立國

驚くべき卓見

福澤先生の追想

の基礎としなければならぬ。といふ事を唱道したのは、實に驚くべき卓見である。

其他國會設備に於て、通商貿易に於て、先生は常に一代の輿論に先んじて、社會の將來を豫言して居る。此點に於て先生は實に日本文明の先導者である。偉大なる豫言者である。然り而して、明治に於ける無冠の救世主であると云はねばならぬ。

斯の如く、先生は凡そ社會の何事に對しても、常に確乎たる卓見を抱いて居た。爾うして其將來を豫言した。けれども先生は實行者でなかつた。自ら手を付けて、それをやる人ではなかつた。寧ろ顧問の地位にあつて、人の相談に與る人であつた。實際先生は日本社會に於け

る新文明の鼓吹者として、顧問役に甘じて居られたのだ。左なくして實行家たらんとするには、餘りに先が見え過ぎたのである。

先生の著作、先生の事業、することなすこと一々社會から非常な注意と、非常な歡迎とを受けるので、世俗の一部には先生を目して、商賣人であると卑下するものもあつたやうである。けれども、それは賤劣なる俗人の偏見に過ぎない。言はゞ小人共が先生にケチを附けたものであつて、實際先生は立派な學者にして、又社會の教育家であつた。

今日福澤先生を措いて、他に政府の厄介にならないで、あれ程の事業を爲し得た人物が一人でもあるか、只森村市左衛門氏は比較的獨立の人であるが、他は皆いふに足らないのである。自分は政府の厄介に

ならないとか、立派なことをいうて居るが、實際はさうでない。そこへ行くと、福澤先生は眞に立派な獨立自尊の人であつた。

先生の門下生は、今や天下に瀾漫して、社會の最も健全なる、中等階級の大部分を構成して居る。三田派の人達の聲言する所に依れば、日本の新文明の十中の七は、福澤門下の秀才によつて建設されて居るといふことである。吾輩の見る所を以てしても、二分の一は確かに福澤先生の門下生であらうと思はれる。何れにしても其の國家に盡したる功績の偉大なることは、争ふべからざる事實である。孔子の弟子は一千人、其中特に學藝に秀でたるものが七十名、更に七十名の中に十哲といふものが、最も人口に膾炙して居る。之に依つて觀ると、支那

の如き大國に於ては、孔子の如き聲名を以てしても、弟子は僅かに千人に過ぎなかつた。然るに、福澤先生の門下生に於ては、直接間接先生の薰陶を受けたもの、少くとも三萬の多きに達して居る。此點からいつても先生の偉なることは、誰しも認めざるを得ない所であらう。唯、三田の門下に、餘り俊傑の出なかつた事は、先生の大きな不幸といはなければならぬ。殊に其の薰陶を受けた門下が、生前其先生を餘り好く云はなかつた傾のあるのは、實に惜むべき事である。最も先生が死んでから、皆一齊に先生の徳を稱するやうになつたが、昔は随分先生から『馬鹿野郎』を喰つた連中が、陰で先生の事を、彼是といふたものもあるとの事だ。

要するに、彼等は眞に先生の價値を見出すことが出来なかつたのである。釋迦でも孔子でも、あれが世界の聖人として嚙されるやうになつたのは、其の弟子に偉いものが多かつたからである。福澤先生が比較的好い弟子を得なかつたのは、實に先生の生涯に於ける一大不幸と云ふべきである。若し門下生に俊傑があつたならば、先生も今頃は孔子以上の人物として認められて居るかも知れない。

若しそれ慶應義塾の現在及將來に就いては、吾輩茲に餘り多く云ふ事を好まない。只其の昔、先生が天下の大平民を以て任じ、其の學徒を將いて、帝國大學に拮抗しようといふやうな希望は、此後或は到底之を慶應義塾に望む事が出来なからうと思はれる。

勝海舟伯の印象

私が初めて勝伯に面會したのは、何年頃のことであつたか、確か、高野長英先生の書いた、諸葛孔明の『出師表』を持って行つて、其鑑定をして貰つた時であつたと記憶する。それは、大畫箋紙位なものに書いたものであつて、未だ表装も何もしてなかつた。其の時一つ奇妙に感じたのは、勝伯が始め初對面の人に對して横を向いたまゝ、話をし居る事であつた。それから、段々話に興が入つて來ると、何時の間にか相手と相對して來る。其處で、初めて遇つた時には、餘程奇態な

癖を持つた人だと思つた。伯は私が持つて行つた、高野長英先生の手蹟を披けて、凝然と見詰めて居たが、私の方を向くと儼然容を改めて『お前は何うして之を持つて来たのか』と問ひ掛けた。

お前は不都合だ

私は變な問を發する人だと思つたが、『先生にこの書を鑑定して貰ひに来ました』と云うた。すると伯は『イヤ爾うであるまい』といふ、『爾うです』と答へる、二三度同じ事の押問答を繰り返した後、キツト改まつた伯は『お前は此手蹟が餘り立派に書いてあるから、之が高野長英の眞筆か何うかといふ疑ひを起して持つて来たのだらう。』と詰問した。私は『爾うです』とありのまゝを答へると、伯は佛然色を爲して一喝された。『お前は不都合な男だ。今時の洋學者と云ふ奴は、一體自

分の名も碌々書けないものばかり揃つて居るから、恚う云ふ手蹟がある」とそれを疑ふのではないか、實に先輩を辱める不埒な所爲と云ふべきである。自分を以て故人を推すといふ事があるか』と云はれた。そして『抑も此書は、一氣呵成に書いたものであつて、徹頭徹尾筆者の精神が活躍して居る。即ち之は唯單に文章を寫したと云ふばかりで無い。筆者が孔明の壯烈な意氣に感じて、其文章を盡く諳誦して居て、一氣呵成に書いたものである。之が分らないか』と聲色を勵まして申された。

乃公が箱書する

それから『之は、もう少しも疑ふ所はない、高野長英の眞筆である。早速表装しろ。爾うすれば乃公が箱書してやる。』と云はれたので私

乃公の頸
は伸縮自
在だ

勝海舟伯の印象
三三〇

は大に喜んで、其後箱書して貰ひに行つたことがある。其時伯は「お前は醫學をやつて居るさうであるけれども、人間の頸の働きを知つて居るか」と云はれた。そこで私は「知つてゐます」と答へると、伯は「處が普通人間の頸の働きといふものは、左右に廻轉させるか、上下に肯くか、それより他に働かせる事は出来ない。今普通の人間が頸を左右に廻轉させて見た處で、僅かに後の方を見る事が出来る位のものであるけれども、乃公の頸は決して爾うでない。上下に伸縮自在である。」と。伯は得意満面で話された。私は實に伯が不思議な事を云ひ出したと思つて聞いて居た。

「それから、見よ、大久保でも、西郷でも（西郷だけは先生だ）又高野

頸を伸ば
して向ふ
を見よ

長英でも、此上下に伸縮する頸を持つて居なかつた。勢弱し、事決し難き時に當つて、自分の頸を伸して向ふを見ることが出来ない。若し此働きがあつたならば、向ふに別天地が見えに違ひない。別天地に見える所があつたに違ひない、此の働きを忘れて仕舞つて、突嗟の間に事を決めて仕舞はうと思ふから、竟に不慮の最期を遂げなければならぬことになつて居る。乃公なども、實に彈丸矢石の間に刀を携へて出たことは幾度あつたか判らない。而かも今日首足を全うして、國家の爲めに盡す事を得るのは、眞に此頸を上下に伸縮する事が出来たからである。」と、伯は云うた。私は此話によつて、今日ある勝伯の偉大なる所以を知る事が出来た。

伯は猶、語を繼いで、「乃公は唯命が惜くて、今日まで生き長らへたのではない。乃公は眞實の長壽法を知つて居たからだ。お前は何處かに好い所があるから、此長壽の秘傳を教へてやる。決して忘れちゃ好けない」と、恚う云はれた。上下に伸縮するの頸の働きと云ふのは、電光石火、如何なる突嗟の間に處しても、綽々たる餘裕を存して、常に眼を大局に放てといふ教訓であらう。私が初對面に於て勝伯から受けた印象は、概言すればマア恚んなものであつた。

岩倉右大臣初對面の回顧

願ひ回らせば、明治十六年二月の事であつた。其時私は丁度二十六歳で、名古屋愛知病院の院長をして居つたが、衛生局長の長與專齋氏が、私に書を寄せて頻りに上京を促した。それは、以前私が衛生の事に關して、何か衛生局に建白したことがある。其建白書が長與氏の氣に入つたものと見えた。上京すれば少納言に推薦してやらうといふ文意であつた。餘り熱心に勧め呉れるので、三度目の時に其事を石黒(忠憲)男に相談すると、石黒男はさういふことなら早く行くが宜

衛生局に
建白

上京をひき止める

岩倉右大臣初対面の回顧 二三四
い。地方の病院長から少納言にして遣らうといふのは、先方でも餘程
拔擢した積りだらうと言はれた。けれども、其頃同じく名古屋病院長
であつた横井氏が、長與氏と仲の悪い人であつたので、頻りに私の上
京を止めた。それに病院の患者連も、頻りに私の上京を止めて、若し
此儘名古屋に居て呉れるなら家も建て、上ませうとまで云ひ出した。
家を建て、呉れると云うた處で、名古屋城ほどの邸宅を拵へて呉れ
るといふ譯でもあるまい。何うしようかと思つたけれども、折角、皆
が止めて呉れるので、今少し名古屋に留まる事に決めて、兎に角、東
京から父母を呼び迎へようと思つて上京した。其時長與氏に逢つて見
ると、氏は喜んで、どうも好く早く来て呉れた。一昨日打つた電報を

役人はイ

見て来たのかといふ、私は、いゝえ、それは話が違ふ、今度上京した
のは、名古屋に兩親を迎へる爲に來たので、貴下の召に應ずる爲めに
來たのではない。電報は大かた私の留守に着いて居るのでせうと云ふ
と、長與氏も、左様か、實はあの電報で來たとすれば、餘り早過ぎる
とは思つた。マアそんなことはどうでもよろしい。此儘此方に勤めて
はどうかというて呉れる。其處で、私は役人はイヤだと言つて、少納
言を辭退して、其の代りに衛生局の御用係、今言ふ囑託の様なものに
なつて、月給は少納言同様に百圓宛貴ふ事になつた。それから一ヶ月
ばかり経つて、明治十六年の二月、ちやうど時の右大臣岩倉公が熱海
に滞在中、用事があつて、長與衛生局長をお召しになつた時、長與
岩倉右大臣初対面の回顧 二三五

大臣に
あつた初め

岩倉右大臣初対面の回顧
三三六

氏は其代理を私に命じて來た。私は長與氏が、私のやうな窮措大に、
愆んな大役を命ずるのは、よく／＼私を信じて、試験の爲にするのだ
なと思つたけれども、構ふものか、何でも自分の思つた通りに遣つて
退けようと決心して、いよく熱海へ出掛けて行つた。

其時熱海で、右大臣に對面したのが、抑も私が大臣といふものに會
つた初めであつた。それから大臣の旅館へ行つて見ると、公は「其處
へ來たのは後藤か、此方へ入れ」といはれた。私は心の中で、大臣と
いふものに偉い權幕のものである。初対面の人を呼び捨てにして、平
氣な顔をして居ると思つて居た。すると「お前は何處に泊つて居るか」
といふ。「鈴木屋に泊つて居ます」と答へると、何故此處へ來なかつた

細かい處
に氣がつ

といふ。公は其時、相模屋といふ宿屋に泊つて居られた。「此方は嘸混
雑だらうと思ひまして、——」といふと、岩倉公は「それぢや直ぐに
コチラへ來たら宜からう」と言ひながら、山本と言ふ秘書官を呼んで
「何故出迎ひに行つて、乃公の宿に連れて來なかつたか」といひ、「いや、
今朝は大變雪が降りましたから、お着は屹度遅からうと言ふので、ッ
イ控へて居りましたので、誠に濟みませんでした」と答へて座を去つ
た、後藤々々と呼び捨てにして居る半面には、宿屋の事など心配して
呉れる、充分細かい處まで氣の届く偉い人だなど、其時私は非常に
感心した。

それから色々話をした結果、公は貧民の爲に熱海の温泉の出る口許

岩倉右大臣初対面の回顧 三三六
に肺病患者などの用ひる吸氣管を拵へて呉れる、好い考へがあつたら
直ぐ取掛つてほしいといふ事であつた。其處で私は、それはいけませ
ん、種々物理學の上から考へて拵へるのですから、貴下のいふやうに
今直ぐといふ譯には行きませんと、無遠慮にドシ／＼云つて退けた。
それから、私は公に對して、凡そ貧民病院には二種ある。一は人間の
拵へた病院で、一つは天然の病院である。即ち熱海の如き此天然の病
院には、吸氣管などよりも、寧ろ水道や下水の設備を完全にしてやる
事でなくてはならぬと云ふ意見を吐いた。すると、公は連りに首肯い
て居られた。

話をして居る中にカステラの菓子が出たので、私は何氣もなしに、

二ツある内に一ツ半ばかり食つて仕舞つた。やがて其處へ入つて來た
のが伊藤侍醫である。すると公は相變らず「此方へ來い」と願でいふ。
私は心の中で、オヤ／＼乃公だけにあんな態度をする事かと思つた
ら、誰にでもするのだな、大臣といふものは偉いものだと思つて見て
居ると、伊藤侍醫は、擦り膝をして入つて叮嚀に挨拶した。私は高貴
の人の前に出るには、あんな事をしなければならぬものか、知らない
で無遠慮なことをしたと思つて居ると、公は例の吸氣管の相談を持出
して、私の説を話した上に、お前はどう思ふかと云はれた。すると侍
醫は「イヤ、後藤さんの云はるゝ事も尤もで御座ますが、大臣の仰
る事も御尤もで御座います」というた。其處で私は大臣に物を云ふに

はあ、いふ調子に遣なければならぬのだなと心の中で首肯して居た。すると、今度は其處へ文部卿の福岡孝悌と云ふ人が入つて來た。公は矢張り、『あ、福岡か此方へ來い、之は後藤といふので、長與の代理に來たのだ』というて紹介された。此人は例の擦り膝はしなかつたけれども、可なり叮嚀にして居た。それに續いて外務卿の井上馨さんが入つて來たが、岩倉公は相變らず井上くと呼び捨てに呼んで居た。それから印刷局長の得能と言ふ人が來た。此人は大風ではなかつたが之までの人に比べて極めて無頓着に入つて來た。さうして、此等の人達も皆菓子に貰つたけれども、些とも手を着けない。私は又一つ失敗をした譯である。

やがて伊藤氏を初めとして、井上、福岡、得能氏といふやうな順序に、皆辭して歸り始めた。黙つて見て居ると、貰つた菓子は皆紙に包んで懐に入れて持つて行く、私は此時初めて、高貴の人に貰つた菓子は、紙に包んで持つて歸るものだといふ事を覺つた。其處で喰ひかけのカステラを半分紙に包んで自分の宿に持つて歸つた。

其晩私は鈴木屋を引揚げて、相模屋に泊る事となつた。處が、隣室に肥田濱五郎といふ公に昵懇の海軍機關總監が寢て居て、襖越しに隣室は誰ですかと聲をかけた。私は後藤ですと答へると、私は肥田といふ者だが、此處を開けて一處に話をしようぢや無いかというて襖を開けた。それから肥田氏は、馬場下の老爺はナカク親切で、頻りに

君を譽めて居つた。菓子も言傳つて來たから、明朝渡さうというて呉れた。私は、馬場下の老爺といふのは誰のことだというて聞くと、肥田氏は岩倉公の事だといつた。之は岩倉公が、櫻田の馬場下に邸宅を控へて居られたからであるが、何ういふ譯で菓子を呉れたのだらうというて聞くと、それは誰でも菓子を紙に包んで歸るのに、後藤ばかりは乃公の前でムシャ／＼食べて歸つた處を見ると、餘程菓子が好きだと見える。後藤は實に面白い奴だ。あの子供に菓子を持つて行つて遣れというて、岩倉氏が肥田氏に言傳けて呉れたとの事であつた。私は今更のやうに、公の偉い處に感心した。公は斯くの如く、一點大名風のない、極めて磊落な人であつた。けれども、又些細な事の末に至る

注意の行
き届く人

まで氣の附く、用意周到な人であつた。私が今話した、宿屋の事と云ひ、菓子の事と云ひ、初對面に於て得た印象に就て見ても、公は實に注意の行き届く人であつた。之は私が初めて公に對面した時の感想である。

予を感化せる高野長英

明治の御維新は丁度私の十一歳の時で、その時に藩を廢して縣を置かれた。私の郷里は今の岩手で仙臺領であつたが、その仙臺領にも膽澤縣と云ふものが置かれる事になつて、縣令には後に何れも男爵となつた、安場保和、野田豁通などいふ人々が赴任された。この人たちは、皆新しい知識を持つた人たちで、私は當時子供心にも、はじめて「當世の人」に接近することを得たやうな心持ちがして、非常に嬉しかつた、そしてこの人たちから佐久間象山や、横井小楠などいふ人があ

つたことや、また此等の人柄や舉動の一斑を聞いて、「豪い人」といふ觀念を持つやうになつた。

それに私の郷里からは高野長英、箕作麟祥などいふ人が出て居たので、時々是等の人の人と爲りをも聞いたが、どの位豪い人であつたかといふことは丸つ切りわからなかつた。ところが、安場さんから、

「世間では高野長英を悪いことをしたかのやうにいふけれども、決してさうでない。悪事をしたやうに思はれたのは、高野長英は非常に新しい知識を有つて居たに引更へ、幕府が非常に古臭い考へを持つて居たからの事で、今日に於て彼を誇るべきいはれは少しもない。」と聞かされて、はじめて高野の人物を知つた。高野長英は、文政三年丁度彼

予を感化せる高野長英

二四六

が十六歳の時、父の名代で名主善兵衛の無盡に行き、運よく圃に當つて十五兩を懐中し、村境の水澤の橋を渡つたが、ふと大間秀吉が立身の爲に、松下嘉平次の黄金二枚を盗んだといふを思ひ起して、自分も學問の爲ではあるし、まして父の金子であるから悪いとはあるまいと、その金を懐中にして江戸に出で、最う江戸に居つても覺えることのないほどの奥義を極めて、それから長崎へ行つて、名醫シーボルドの門に入つて蘭學を研究し、再び江戸へ歸つて醫者を開業した。

この頃は長崎に行くのは非常な事件で、今日外國に洋行するよりももつと困難であつたのだ。その困難をやり遂げて江戸に歸つた高野は開業しても普通の醫者とは異つて、衣服や藥類なども決して見え張

予を感化せる高野長英

二四七

らず、貧乏人には無料で診察してやつた。その代り大名を診察した時には、煎藥一服の代價十兩つゝも取つたといふことである。そして是等の金を皆貧乏人の藥代にかけて、自分では少しも、贅澤はしなかつた。また高野長英は頗る蘭學に通じて居つたから、蘭書を通じて外國の事情にも明かであつた。この時分外國の事をよく知つて居たのは、高野に渡邊華山、小關三英ぐらゐるものであつた。

天保九年、英國人モルソンが、日本の漂流人三十人を連れて來て交易を乞うた。時の老中水野越前守は、

『外國船來らば討ち拂へといふことは武家八ヶ條の中にある家康公の御遺言である』と激烈な攘夷論を主張した。幕府の老中若年寄は殆ん

予を感化せる高野長英

二四八

ど七分通り此の論に同意し、英國と戦争もしかねまじき有様であつた。英國は當時世界三分の一を領して、とても日本などは側にも寄れないといふことを、ちやんと知つて居た高野は、非常に心配して幕府へ建白書を奉らうとしたが、到底行はれないから鬱憤晴らしに『夢物語』といふ本を著はして、幕府の愚な眠を醒まさうとした。ところがこれが却つて身の仇となつて、天保十年に華山や何かと一緒に捕はれてしまつた。高野は牢を出ればまた悪い本を著すといふので、終身懲役に處せられた。非常に孝心深い高野は、牢の中に居ても常に親の事を忘れず、ある時老いたる母へ送つた歌に

嘆かるゝ身よりも嘆く老の身を

嘆きこそすれ嘆かるゝ身は

と詠んだ、然し國家の危急を思へば、むなしく牢獄の中にあるたゝまれないので、一度脱獄をした。そして劇薬を顔へ塗つて人相を變へ、澤三伯と名のつて、島津齊彬を頼つて國事に奔走しようとしたが、事半途にして露見し、再度追手に取巻かれたので、彼れは天命とあきらめ、四十七歳を一期として切腹して果てた。時に嘉永三年十月三日であつた。

であるから、高野は決して悪いものではない。時世が高野に適しなかつた爲に、智識があまり時勢と隔絶したが爲めに、其識却て累をなして悲惨な最期を遂げたのである。だから明治の御世になつて叙位の予を感化せる高野長英

二四九

御沙汰があつた。もし高野が明治の御代まで生きて居たなら、必ず國家の高官になり得て、國家の爲に其智識を發揮し得た事と思ふ。當時膽澤縣の役人に阿川光裕といふ人が居つた。役人としての地位は餘り高くなく、安場が大參事の時に屬官位の處に居たが、後に高等官になつて官をやめた。もし薩長の出身であつたなら縣知事ぐらゐにはなつたらう。阿川は安井息軒の門人で有名な兵學者であつた。常に支那兵法の大家、孫子、吳子を賞讃して、孫子の所謂「修身齊家、治國天下」は、世間で無用の言、誤れる解釋のやうに云ふが、これは大なる謬見であると、一々理義を講釋して、細かに教へて呉れた。この人の性行は極めて謹み深く嚴格で、私の今日あるは全く阿川氏の爲め

で、其力ある感化は、今も尙私を支配して居る。

その頃大參事をしてゐた安場は、

『この子供を己の處へ置いては碌なものになれまいから、君の手で育て上げて呉れ』と阿川に對して私の教育を頼まれた。其の時私は丁度十一歳であつた。安場は尙語を續いて『この子の性質は矯めてはならぬ。天性その儘にして育て、貫ひたい。この子は他日參議になる男であるから、その積りで充分教育を頼む』

と云はれた。この時たしか野田男爵も同席で聞いて居られたと思ふ。何でも今日耳に残つて居るやうな氣がする。阿川の處に居ては安場の云つた通り、私も性情を詐らず全く有りのまゝで通した。安場がやは

りかういふ質で、缺點は缺點としてさらけ出し、包み隠しすることが大嫌であつた。このやうな譯で、私は子供の時は何もかも阿川氏に仕込まれた。私は今も猶ほ阿川氏を師匠として仰いでゐる。私は阿川氏などの感化に依つて、高野長英などの偉いことを知り、さういふ人に私淑して大に得る所があつたのだ。

兒玉大將と余

さうだ、私が初めて兒玉大將に會つたのは、中央衛生會の委員として、二十七八年の戦役から還つて來る軍隊が、恐るべき傳染病を全國に蔓延せしめんとするのを豫防せんが爲めに、内務省の代表者久米金彌と云ふ人と一緒に、廣島に出張して其會議に列した當時の事であつた。それから石黒忠憲さんにも會つた。而して會議の結果、之は後方勤務に屬する事で、大本營のやる事で無いといふ事になつた。其處で私は陸軍省の兒玉大將に會見する必要が生じて來た。

兒玉大將と余

兒玉大將
に會見す
る必要

會議の翌日であつたらうか、最初私はステーションで偶然兒玉大將に會つた。大將はちやうど何處へか出掛けようとして居る處で、其處には石黒さんも居た。私は兒玉さんに會つて、實は云々の公務に就て、閣下に御面會を願ふ必要があると云ふ事を云つた。すると兒玉さんは、爾んなら役所で會はうと云ふ事になつたので、私は當時の陸軍出張所で兒玉さんに會見した。

其時、兒玉大將は會議の結果を聽いてそれでは其事務は一切陸軍省で引受けてやる事とする。經費は幾何位かゝるかというて訊かれたので、私は直に、百萬圓位かゝりませうと答へた。すると側に居た石黒さんが私に向つて、大きい事を云ふものでない。そんなことを云ふか

ら困ると注意した。けれども私は確信する所があつたので、私は斯う思ひますと云ふと、石黒さんに、どうしてそんなに掛るのかと、反問されたので、そこで改めて概算を示した。すると兒玉さんは私に向つて、それなれば百五十萬圓あつたなら、内地に虎列刺病が侵入しないやうに豫防が出来るのかと云はれた。私は出来ませうと答へた。それでは愈々陸軍省で引受けて、遣る事にしようといふことになつた。私は其處で兒玉さんと分れて宿に歸つた。

其れから兒玉さんは石黒さんに向つて、何ういふ人を其任に當てるかといふことを問はれた。すると石黒さんは私が遣るより仕方がないが、私は大本營に附いて旅順に行く爲に直ぐ出發しなければならぬ

ので、差し當り後藤にやつて貰ふより他にない。若し後藤が遣つて出
來ないといふならば、それは私が遣つても出來ないのであると云はれ
た。すると兒玉さんが、それでは後藤に話して遣らせよとのことであ
つたので、石黒さんから私の宿に使が来て相談があるから来て呉れと
いふ事であつた。

石黒さんの處へ行つて見ると、今日の話は慥ういふことになつたか
ら、君一つ遣つて呉れないかといふ相談であつた。其處で私は、立ち
所に其れを斷つて仕舞つた。と云ふのは其頃私は丁度牢から出たば
かりで、どうしても仕官し得るものでなかつた。出獄後直に中央衛生
會の代表者として、戦後悪疫豫防の計畫をする爲めに、廣島に派遣せ

官吏にな
る氣はな

られたけれども、實は之とても私の素志ではなかつたのである。何故
かといふに、其頃阪神の間に私の世話をしようといふ人があつて、
もと取つて居たゞけの月給は何時までやるから遊んで居ろ。それに
一年に千圓位の旅費は出すから氣儘に遊んで居るがよい。西洋に行き
たければ、行つて來るもよからうというて呉れる人があつたので、敢
て其人の世話になるといふ積りでもなかつたが、只官吏だけにはなる
氣がなかつたのだ。其處で私は石黒さんに向つて固く辭退した。處が
石黒さんの云ふのには、爾んな事を云うては困る。それでは明日又一
處に陸軍次官(兒玉大將)を訪ねて、話して見ようといふ事で別れた。
此交渉の顛末に就ては、其時同宿して居た、内務省の久米金彌君も好

兒玉大將と余

く知つて居る。
それから翌日又石黒さんと二人して兒玉さんに面會した。すると兒玉大將は是非私に遣つて呉れといふので、私がいふには、之を遣るには何うしても別に官制が必要である。これは陸軍の軍醫となつて遣るべき仕事である。けれども陸軍は終身官である。自分は終身官などになる事は何うしても嫌である。のみならず陸軍の方でも無暗に高等軍醫を任命するといふことは出来ない。何方にしても出来ない相談であるからお断りするといふと、兒玉さんが、それでは別に官制を出しても好いから遣つて呉れといふ事になつて、私も遂に辭するに詞がなかつたのである。其處で私は初めて陸軍計理事務官長といふ事になり

兒玉大將は其部長といふ事になつた。

此初對面に於て、私は兒玉さんを特に取立て、偉い／＼とは思はなかつた。けれども只鋭敏な人だと思つた。といふのは悪疫が流行すれば、百萬や二百萬の金は、忽に飛んで仕舞ふといふ事が、直ちに分かる丈けの頭があつた。當時の百萬圓は今百萬圓とは違ふザツト一千萬圓位に當る、兒玉さんは其の百萬圓に驚かなかつた、それだけ大局を見るの明があつて、決斷に躊躇しない人であると云ふ事が分つた。併し感服したのは其點だけで、私はそれ程偉い人とは思はなかつた。何しろセツカチな人で、一寸見ると神經質の人のやうにも見えた。

處が、其兒玉さんは、一處に仕事をするやうになつてからは、一切

兒玉大將と余

初めて
えらい人
と思つた

兒玉大將と余

三〇

私に任せつきりで、少しも干渉したことがない。其中に兒玉さんに宛て、私の中傷を電報や、手紙でするものが續々あつたけれども、兒玉さんは更に頓着しなかつた。一切私に委せて少しの干渉もしなかつた。茲に至つて私は其襟度に感服した。實に偉い人であると思つた。然るは兒玉さんは陸軍で非常に有名な干渉家であつた。其の干渉家がスツカリ私に一任して、少しも口を出さなかつたので、陸軍の人達も些が驚いた。私は斯くして、自分の計畫通り萬事を處理して行く事が出来たのである。萬事に干渉好きの兒玉さんが、どうして私にばかり一任して、少しも口を出さなかつたかといふ事は、今でも不思議に思つてゐる。

私を了解
してくれ
た

兒玉大將と余

二六

其後私が民政長官として赴任する時でも、陰では皆が云うて居た。臨時陸軍検査所の中には、兒玉さんが何も解らないので、萬事後藤に一任したけれども、今度はキツト甚しい干渉をする。爾うして兩方が衝突するから見て居るといふ噂をした。友人からも注意するやうにいふ忠告もあつた。處が私は實際臺灣に行つてから九年間、少しも喧嘩をした事がなかつた。之は實に不思議である。何でも私が設計して、詳しく説明すると何でも宜いというて裁可するので、サツサとやつて行くことが出来た。其辭兒玉大將は、外に向つては随分干渉もしたらしい。兎に角、大體に於て、私を了解して居てくれたものは兒玉大將である。

伊藤公も私を了解して呉れた。或點に於ては、兒玉大將以上に了解して呉れたかも知れない。けれども兒玉大將は大體に亘つて私の人格を了解して呉れた。私と兒玉さんとの間には一髪の間隙も無かつた。親子兄弟と雖も、意志の合はぬ處のあるのに、二人の間には死ぬるまで意志感情の齟齬が無かつた。

只兒玉大將が死する前に、私に滿洲鐵道の總裁をやれといふ、私はやらぬといふので少しく議論をした。晝の零時三十分頃から、四時頃迄話したけれど、私は遂に遣らぬといふ事になつて分れた。其時に兒玉さんは、態々私を玄關まで送つて来て呉れた。爾うして後藤、お前は只遣らぬといふことばかり考へてはならない。若し遣るならば、

永久の名

慙うしたら遣れるといふ事を考へて見なくてはならぬ。兩方よく考へて来て呉れ給へといはれた。今にして思ふと此一語が永久の名残で、兒玉大將は其晩に亡くなつて仕舞はれたのだ。肝膽相照した私と兒玉さんとの交際は、斯くの如くにして始まり、斯くの如くにして終つたのである。私は其後滿洲鐵道へも行つた。鐵道院總裁もやつた。今にして當時を追懐すると、大將の英姿が、髣髴として眼前に迫り来るを覺えるのである。

予の好む青年

一言にして盡せば兵卒よりして大將となるが如き青年は、吾輩後藤新平の最も好愛する所である。是れは余が好む青年の全體にして、是れ以外に余の好む青年はない。で、以下に述ぶる所は如上の意味を敷衍するに外ならぬのである。兵卒より身を起して大將になると云ふのであるから、先づ兵卒の如く規律正しく自分の分を守り、完全に責任を盡す人でなければならぬ。自己の責任を盡すといふことは、何人も何れの場合にも大切な事で、給仕をさせれば立派に給仕もする、掃

兵卒よりして大將

誠は活動大原動

除をさせれば綺麗に掃除もする。簿記をやらせれば、間違なく簿記を記けるといふ人でなければ、爾後の發展は愚か、其位置にさへ止まる事も六ヶしい。己の職責を盡し得ぬ奴は後藤新平の最も嫌なものである。一體、自己の職務を行つて、完全に責任を盡すといふのは、義理や、考へ位では到底出来ぬ。衷心から迸る『誠』が、其の人の身に備つて居なければ不可ぬ。『誠』は人間活動の大原動力で、この誠が親子の間に顯はるれば孝となり、君臣の間に顯はるれば忠となり、國に關して顯はるれば愛國となり、自己の職務に關しては忠實となるものである。『誠』さへ人間の身に備つて居れば、思はぬことを口にするとか、い加減な事をするとか、職務を誤魔化すとか、又は衆人を籠絡して、

予の好む青年

分不相應な箔を着けるなどいふ忌な事は決してせぬ。是れが人間の眞價である。即ち余は、先づ職務に忠實なる「誠」ある青年を好む。が、職務に計り忠實でも、生涯兵卒で終るやうなものは嫌ひだ。やがて大將になる器量がなくては駄目だ。

忠實——換言すれば堅忍不拔——は、勿論よい事ではあるが、永年同一の業務に従事するといふのは、必しも稱揚すべき事ではない。新聞などを見ると、勤続三十年間の小使だとか、番頭だとか、又は巡査だとか、非常に賞め立てるが、あれは少々間違つて居る。成る程三十二年間勤続の辛抱はえらいものであるが、其の偉らさ加減は、只、同じ所に永く辛抱して居つたと云ふだけで、向上発展の面影が更がない。

巡查は何時も巡查、小使は何時でも小使で、生涯を終つて差支ないものなら、社會の向上発展はなくなる譯だ、之では始末に行かぬ、折角、生氣勃勃たる社會が、死灰に化して了ふのである。然り、兵卒でありながら大將になるの心掛け、職務に忠實でありながら常に向上発展の一路に目を注ぐ心掛け、是は何人にも大切で、殊に青年には最も大切である。余は斯の如き心掛けある青年を好むものである。

以上の如く向上発展の一路を辿つて、行く／＼は必ず大人物になれると云ふ信念が腹の底にあれば、現在如何なる卑近の地位にあるも又、如何なる卑賤の職務を執るにも平氣でやれる。即ち、職務に忠實にして、其効果を擧げる事が易々たるものである。彼の大學などを卒

予の好む青年

人物の小さい證據

予の好む青年
業したもののどもが、自ら自分を買ひ被つて、實務などは更に知らぬ癖に、聊か卑近の實務から練習をさせようとすれば、イヤな顔をするなどは人物の小さい證據である。斯んなことでは、大將は勿論、兵卒にもなれぬ。斯の如き青年は大嫌ひである。

事柄は略同一であるが、小利害に拘泥して大局を忘るゝ青年も嫌ひある。勿論、場合に依つては、殘務の始末もしなければならぬ。厘の勘定もせねばならぬ。けれども、是が爲めに事の大局を忘れてはならぬ。職務に忠實にして、向上發展を心掛けるとはこの事である。されば、眞に大事に目を注いで、心中歴々たる成算があるとすれば、是を口にしても決して大言壯語として排斥すべきものではない。

最も好まぬ所

要するに行る積りで、行れる事を云ふなら、大言でも、壯語でも、一向かまはぬ。是を嫌ひだと云ふ人もあるが、余は決して排斥しないと同時に、イクラ眞面目臭き事でも、尤もらしき小さな事でも、行へぬ事、又行ひ得ぬことを云ふのは、取も直さず大言壯語であつて吾輩の最も好まぬ所だ。要するに余は、兵卒より身を起して大將になり得る青年を好むものである。

理想の青年

規律

嚴格に規律を正し、よく己れの分を守り、充分に責任を果すことは如何なる人にも、如何なる場合にも大切なことである。門番をさせれば、能く門を守り、小使をさせれば眞面目にしっかりと小使をやる。配達夫をやらせれば、敏速に確かに配達をやる。而して勉むべき時に勉め、休むべきときに休む、と云ふ人間でなければならぬ。よくあることだが、休むべき時間にも故ら休まずにやつて居るものがある。斯云ふ反則の人は、勉むべき時に休んで居るものである。それで勉むべき

犠牲的精神

ときによく勉め、遊ぶ時に能く遊ぶものでなければならぬ。自分の職責を完全に果たすには、義理や、面目や、他の制抑位で到底出来るものではない。衷心から迸る誠を以て、己れを犠牲として當らねば不可ぬ。犠牲的精神があれば、職務を誤魔化すとか、體裁を銜ふとか、苟も良心に恥づる様なことは出来ぬ。斯ういふ青年でなければ駄目だ。

而して常に向上發展の一路を辿つて、將來は必ず大人物になれるといふ信念がなくてはいかぬ。此信念さへあれば、現在は如何なる卑近の地位にあるも、又如何なる卑近の職を探るも平氣でやれる。決して現在の逆境を顧みて落膽するやうのことはない。新聞配達夫であれ、

下から目
をつけよ

理想の青年

二七三

牛乳配りであれ、車夫であれ、更に苦しむところはない。そして忠實にやつたなら、キツと成功する事は受合である。人間は何でも下から目をつけたがよい。一步づ、築き上げて、やがて倒す可らざる大建物とならねばならぬ。ところが、現代に於ては、恚様な青年は全く乏しい。只身の樂を望み、金ばかり欲しがらるやうでは、到底理想の青年として語るに足らぬものである。

倅て、充分の希望を有し、堅忍不拔の精神があつて、犠牲的覺悟があつていざ社會に立つとしても、之が土臺となるべき、資本となるべき身體が虚弱では、何事もなし得るものではない。俚諺に『命あつての物種』と云ふ事があるが、全く實際の譬喩である。然るに、青年時

妄勇

己を愛するは他を愛する所

理想の青年

二七三

代には兎角此考が薄いやうである。一時の勇に驅られて、随分冒險なことをやる。其勇も、其冒險も、値打ある事柄ならば宜しいが、實にくだらぬ場所に用ゐる。即ち眞の勇ではない。妄勇とも云ふべきである。例へば無謀な探險をやつたり、或は危険な航海を試みたり、甚だしきに至つては、暴飲暴食等を自慢するものがある。是が爲めに、再び得られぬ生命を失つた者があるのを、随分耳にして居るが、斯様なものは自ら愛さぬもので、君から云へば不忠、親から云へば不孝な者である。此他一般の衛生に就ても、元氣旺んな青年時代には、兎角之が怠慢に陥り易いから、此所によく注意して、身を重ずる青年にならねばならぬ。要するに己を愛するは他を愛する所以である。眞に己

を愛するものでなくては、眞の味方として語るに足らない。

天は自ら助くる者を助く

就職難

近來就職難を訴ふる者が頗る多い。之が學校を卒業して間もなき青年のみなれば、左迄怪しむべき現象ではないが、中年者即ち社會に立ちて相當の事業をなすべき年齢に達したる人々の間に却て就職難を叫ぶもの多きは、實に不思議な現象と云はなければならぬ。何となれば、學校卒業者が所謂適當なる職業を得るに苦しむのは、已むを得ぬ事實で、十年前の如く、學校を卒業さへすれば何等かの職業を得るといふことは、今日に於ては容易ならぬ事となつた。即ち現時の社會は凡て

天は自ら助くる者を助く

中年者の
就職難の
原因

天は自ら助くる者を助く

二七六

秩序的になつて、随つて何等か獨特の技能あるもの又は他の儕輩に傑出した長所がなければ、激烈なる生存競争場裡に立つて、優勝の地位を求むる事は不可能である。之に反して中年者の就職難を訴ふるに至つては、他に多くの理由がある。其の第一の原因とも云ふべきは、猥りに職業を轉ずるより起る結果である。猥りに職業を轉ずるの不可なる理由は少しく常識あるもの、何人と雖も知悉せる所であるにも拘らず再々職業を轉ずるに至つては、誤れるの甚だしき者で、随つて就職難を訴ふる者も、其大部分は斯る原因に胚胎せるものと云はなければならぬ。然らば我國には何故に職業を轉ずるもの多きかと云ふに、自己の職業を尊重しないのも一つの原因である。又職業を選択する當

自己の職
業を自覺
せざる罪

初に充分の研究と熟慮を敢てせぬのも一の原因であるが、最も大なる理由は忍耐力の缺乏と、自己の職業を自覺せざるの罪である。

自己の職業を自覺せざる者程世に憫むべきはないのである。彼等は其爲に、些少なる利害問題にすら左右せられて、忽ち昨日の職業を抛ち、新しきに就くといふ有様で其結果即ち萬能定りて一藝達せずといふ一種の不具者となつて了ふのである。かゝる輩が一朝其職を失つた際にはそれこそ何等の職業をも得るに難く、さしく路頭に迷ふの悲境に陥るのである。

凡そ何種の職業と雖、不屈不撓の決心を以てしなければ、到底成功を得るは困難なことである。所謂精力主義を實踐し職業に對する執着

天は自ら助くる者を助く

二七七

職業を轉
合すべき場

天は自ら助くる者を助く

三七六

心を養成し、以て軽々に轉業等を敢てするが如きことなく、歩一步向上發展の策を講ずるは最も必要なる方法で、斯くの如くすれば、自己の職業に對する尊敬心も起り、又一時の利害問題等によりて其職を轉ずる如きこと絶無となるであらう。

而して斯く云へばとて、吾輩は絶対に職業を轉ずるのを否認するのではない。相當の理由さへあれば職業を轉ずるのも敢て差支はないと思ふ。唯其如何なる場合に職業を轉すべきかは、十分研究して後決定すべきであるが、之は一見甚だ容易なるが如くして、實に困難なる問題である。世人の多くが、斯かる際に其方向を誤まるのも無理ならぬ事である。然らば如何なる方法に因れば安全を期し得べきかといふに

最も策の
得たるもの

先づ之を自己が信頼する先輩に匡し、其意見に聽き、又自己の天性が其職業に關して適當なるや否やを考慮し、然る後徐ろに實行すべきである。

然し之よりも尙且安全なる方法は、決して自動的に職業を轉ずるが如きことなく、得たる職業に満足し、熱心に忠實に従事すれば、求めずして人は必ずより以上の地位を得ることが出来るのである。斯くして其方向を轉ずるは、最も策の得たるもので此間には何等の危険も伴はぬといつても差支ないものである。

今其例として自己を語るのには、稍々當を得ぬ處であるが、吾輩が醫者を廢めて、爲政者となつたのも全く右の理由であつて、吾輩は醫師

天は自ら助くる者を助く

三七九

としては相當の地位を得たので、決して自己の職業に對し不満足を感じて居つたのではない。然るに何故其方向を轉じて爲政者と成つたかといふに、前述の如く、全く他動的に己むを得ず方向を轉じたので、自ら求めて得たのではない。

人は能く天網恢々疎にして漏さずといふ言葉を罪人にのみ用ふるものと思つて居るが、之を善き意味に解釋すれば、隠れたる人材を登用するにも又此筆法を用ふることが出来るのである。即ち人は如何なる場合にても、よく熱心に忠實に、勤勉努力すれば、天は必ずより以上の地位を與ふるに吝かならぬものである。即ち前に記述せし如く、前途の方向を轉ずるにしても、何等の危険を伴ふことなく、向上發展を敢て

職業に對する執着心

するは、實に易々たる事である。

職業を轉じた際の感想は、人に依り千差萬別であるが、從來の職業に満足を感じ、若くは甚しき不満足なき限りは一種の不快感を感じるものである。假令第二の職業が以前のものより勝つて居るにしても決して快感を得るものではない。人間には共通した精神があるもので、其内にも職業に對する執着心は何人も持つて居るべき筈である。されば職業を轉じた際には一種いふべからざる感情の浮ぶものである。吾輩が愛知病院長から衛生局長となつた際にも何となく一種の不快感を感じた。後臺灣に赴任した時の如きは、全く獻身的に臺灣開發の實を擧げんことを期して居た。二十世紀の富の旗を新高山に翻し、世界に於

天は自ら助くる者を助く

二六二

ける模範的植民地として、大に發展の策を講じつゝあつたのに、又々已むを得ざる事情に依り滿鐵總裁に轉じ、次で、現職に轉任したので其間絶えず轉々して席暖かなる違はなかつたが、而し之は決して自ら求めて得たのでは無く、悉く先輩の勸誘に依て萬已むを得ず方向を轉じたのである。

而して吾輩は、病院長としての名古屋時代も、逓信大臣時代も、内務大臣時代も、其主義とする處は終始一貫敢て異なる所は無いのである。何時如何なる場合にも、全力を注いで業務の發展進歩を得るのである。一例を挙げれば逓信大臣の職に在る時電氣課を設けたのも醫者時代に學び得た物理學の一端を應用したのに過ぎないので、全然新たなる創

吾輩の今日ある原因

意になつたものではない。

されば吾輩の如きは、再々其方面を轉じたものゝ、未だ嘗て一回だも之を自らした事の無いのと同じく、總ての方面に全力を傾注して奮闘するの決心を實行して來たのである。是れ吾輩が今日を得たる大なる原因である。

然るに現時の青年は、職業を轉ずるに當り一時の感情や利益に左右せられて、忽ち其方向を轉じ、更に明日は他の職業を得んと欲するが如き誤つた考へを持つて居るものが非常に多くなつた。之は時弊の然らしむる處も有るであらうが、其大部分は青年の薄志弱行、堅實なる思想の缺乏した結果であつて、意志の薄弱な病的青年が増加した唯一

天は自ら助くる者を助く

二六三

天は自ら助くる者を助く

の證據である。

自己の才能や嗜好を無視して、猥りに職業を轉じた結果は、終に何等の得る處なきのみならず、一身を誤つて空しく不遇の嘆を發するに至るので、其罪は自ら招いたものだといはなければならぬ。

之を要するに、青年が各職業を選択するに當つては、十分に自己の才能や嗜好の存する處を研究し、又信頼すべき先輩に之を謀り、然る後決定すべきものであつて、一旦決定した以上は、飽くまでも之を成し遂ぐるの決心を以てせなければならぬ。友人が成功したからと云つて、忽ち之を羨望し、其職業を轉ずる如きは、抑も誤れるの甚敷いものである。『業は専らなるに精し』といふ如く、何事にも之に専心従事

すれば決して成功し能はぬ理由はないのである。併し己むを得ず其方向を轉ずるに當つては決して自ら之を求めず、信頼すべき先輩の指導に俟て後決定するの安全なるに若かぬのである。こは極めて平凡なる事實であるが、現時の青年若くは中年者には、此理由を悟らずして猥りに其の職業を轉ずる者多きは、實に慨嘆に堪へぬ所である。

『天は自ら助くる者を助く』で、奮闘努力、何事にも忠實なれば、天は求めずして必ずより以上の地位を與ふるに吝かならぬものである。

天は自ら助くる者を助く

彼も人我も人

世の中では學生といへば皆徽章附の帽子を被つて、金釦の洋服を着たものと思つて居るが、それは甚だ狭い解釋だ。廣い意味から見れば、學生は營に學校に居るものゝみではない。商家の子弟も、農業者の子弟も、官吏も、公吏も、天下の青年は悉く學生だ。吾輩の如きも矢張り頭の白くなり懸つた學生だ。學生を此意義に解すれば、人は皆死ぬまで學生であるかも知れぬ。——これはまた極言だが、學生は狭意義に解して、之れを青年と見ても、また其處に二色の種類を發見する

ことが出来る。即ち正則の教育を受くるものと正則の教育を受けないものとの二種類であるが、何れも學生たることに於ては一なりだ。吾輩の觀る所を以てすると、規則的教育を受けて、その知能を啓發し、その徳器を成就することは、無論大に必要なことではあるが、規則的教育を受けなければ、人に成れぬと云ふ理窟はない。一定の規則に従つて教育を受けず、一定の年限の間修業しないものでもその知能が規則的教育を受けた者の上に出づるものあるは事實である。又未だ學ばずと雖も、その徳行が社會の師表となつてゐる者のあるのも事實である。

それ等の點から考へると、學校教育を受くることゝ、受けないこと

彼も人我も人

とは、別に人間たる者に於て、別段の相違はないのである。昔から古
 聖の文を読み、自然の理を究めて、時に大なる貢献を社會に致し、或
 は大なる譽れを致したる人は、必ずしも學校教育を受けた者に限つて
 居ない。今、吾輩等がその恩澤に浴してゐる發明品などは、却て教育
 を受けたことのない、自ら發明する所の多いやうな人に由つて考へ出
 されて居る。これ等は畢竟、その人が非常に傑出した頭腦と手腕とに
 依るのである。と云ふと個人の力量、技能と云ふものに差別があるか
 何うかと云ふ問題が起つて来る。其處である。大に考ふべき點は――
 一で、吾輩思へらくだ、聖賢の本を讀んで、その足らぬ所、その缺
 けてゐるものを補ふことは中々六ヶ敷い、それは或は聖賢以上の人で

なければ、出来ないことも知れぬが、聖賢の言を實際に應用するのは、
 普通人にも容易に出来ることだ。この點に於て、吾輩は聖賢必
 ずしも遠からずといふのである。此處である『彼も人我も人なり』
 努めて怠らざれば人のなし得し事の我に爲し得ざる事はない。
 併し人の學び得べき程度は定つて居る。それ以上の事は、個人の頭
 腦と手腕とに待たねばならぬ。いくら正則の學校へ通つて、正規の教
 育を受けるにしても、出来ない事は矢張出来ない。教育を受けないも
 のでも、出来る丈けのことは出来る者には出来る。何ぞ恐れん、吾に
 膽と腕とあり、と云ふやうな人は、既に天から稟くる所があるのであ
 る。こんな奴に學問をさせれば、鬼に金棒だ。覆載間及ぶものなし。

油斷大敵

彼も人我も人
併し、天稟の秀でた脳と、優れた腕とを持つてゐないものでも、何も落膽するには及ばぬ。大概の事は勉強すれば行れるのだ。精神一到何事か成らざらんやで、後鉢巻でやつたならば、爲し得ぬ事は天下にあるまい。

天稟の才能ある者は、動もすれば鼻を蠢かして、天下吾に如くものなしと意張りたがるが、斯うして油斷をして居ると後れて了ふ。油斷は大敵である。足の疾い兎はよちよちと歩く龜との競走に負たと云ふ譬喩があるではないか。所で、天才の赴く所も、天才ならざる者の赴く所も、つまる所は同一である。いくら天才だといつたからとて、柵から牡丹餅を夢想してゐては駄目である。何うせ行く所へ行くのだから

規則的效

ら、成るべく正しい、間違ひのない途を歩むのが宜しい。此の點に於て、規則的教育を受くことが必要だ。一定の時に於て、一定の教育を受け、規則正しく秩序を立て、學ぶのは、徒勞を省く上に於て効果がある。便宜がある。故に吾輩は規則的教育を受くると云ふに付ては無論賛成する一人である。

併し、人は悉く正式の教育を受けねばならぬのか否かは、頗る疑問である。吾輩思へらく、天地間は一種の寶藏である。壁は厚く、錠は堅し、中に何物を藏せるかは知らないが貴重なる品が納つてゐることだけは確かである。その證據には時々燦爛たる光明が洩れてゐる。併し扉を開かねば、その何物であるかは分らぬ。正式の教育は、つまり

彼も人我も人

寶藏の鍵

彼も人我も人
如何にして此寶藏を開くべきかを教ふるのであるが、教育さへ受ければ誰でもこれを開くことが出来るかと云ふに、爾う安くは店で卸さな
い。無論、一定の年限の間、一定の教育を受ければ寶藏のあることが
知れるのみならず、その中に何か物は分らぬが、光彩陸離たる貴重な
品があることが知れる。そして鍵さへあれば、その扉を開くことも知
れる。併し如何にして開き得るかは分らぬ、分つても實際に開くには
また一段の工夫を要する。此處が極めて難かしい處だ、また極めて肝
心な處だ。

累ねて云へば、正式の教育は如何にして天地間の寶藏を開くべきを
教へる。併し、教育を受けたと云つても、必ずしも此の寶藏を開き得

頭次第、
腕次第、

るとは限らぬ。無論、誰でも或る程度まで開くことが出来るが、その
程度以上に開き得る鍵を持たぬ。此の秘密の錠は、必ずしも、正式教
育を受けたものゝみが持つてゐるのではない。多くは非常なる苦辛を
嘗め、非常なる工夫を凝して、自らそれを製造したも、手に自然にそ
の鍵が授けらるゝのだ。即ち秘密の錠は、各人の技倆に應じて寄與さ
るゝのだ。開き得ると開き得ぬとは、頭次第、腕次第と云ふことにな
る。自己の信頼し得べき、技倆を養成することの必要なるは全くこれ
が爲めである。然るに今日の青年は、凡て、自分でやると云ふ心かな
く、何でも彼でも人任せで、自ら進んで取り、自ら獲ようとはせぬ。
少し障碍でもあり、防害でもあると、直ぐこれでは堪らぬと云つて惰

彼も人我も人

寝て待つ
者に果報
は来らず

彼も人我も人

二九四

氣返る。こんな事では、到底何事も爲し得らるゝ者ではない。貧苦と、窮乏の裡にあつて、勇戦猛闘し、自己の技倆を磨き上げて、寶藏を開くべき秘鑰を自得することを心懸けねばならぬ。寝て待つて居たとて果報は来るものではない。進取自得の勇猛心こそ、これ即獨立の一步を大地に踏み出す鞏固の基礎である。されば、將來第二の國民となつて、社會の表に活動すべき青年は、若い中に一大勇猛心を奮起し、獨立獨行先づ鞏固の基礎を造り上げて、年を老つてから間違つたり、後悔したりせぬやうに準備をして置かねばならぬ。繰り返して云ふ『彼も人なり我も人なり』人の成し得る事が、我に成し得ぬことはないではないか。努力すべし、大に努力すべし。

美なる努力に對しての報酬は、必ず美なるものであることを證言する。

彼も人我も人

二九五

青年謳歌論

現代の青年が果して
墮落せり

現代の青年の意気が乏しいとか、一世を擧つて浮華輕佻の風に陥つたとかいふのは、世の所謂先覺者とか道德家とか云ふ者の口を揃へて唱ふる所である。然し乍ら、今の世間は果して彼等の説の如きものであらうか、若し假りに之を事實とすれば、それこそ國家の爲由々しき大事であるが、余の見解を以てすれば、彼等悲觀論者の説は必ずしも正鵠を得て居るとは思はれぬ。

頭を冷靜にして彼等の論難する所を深く考へて見ると、愈々益々首

評者の時
代錯誤

肯することの出来ない點ばかりである。何が故に弊衣破帽を被つて肩を怒らしながら大道を横行濶歩しなければ意氣に乏しいと云ふのか、何が故に絹布を纏うて居る者は墮落した人間であるのか、余は却つて、評者自身が時代の推移變遷を知らずに、徒らに皮相のみに捕はれて居ることを氣の毒に思はなければならぬ。先づ考へても見るがよい、今の世に於て、弊衣破帽を纏うて大道を横行濶歩し、苟も目に餘る者あれば直ちに鐵拳を見舞ふと云ふやうなことをしたらば世人は果してそれを是認するであらうか。云ふ迄もなく、時代後れの蠻風として頭から擯斥して仕舞ふ。昔は其の位なことは毛ほどにも思はず、寧ろ青年血氣の餘り仕出來した當然のこと位に考へて居た。さなきだに青年

は亂暴なものであるのに、社會も亦彼等の行動を斯くの如く寛假して居たのであるから、肩を怒らして大道狹しと濶歩したのは當り前のことである。併し今の世にそんな虚威張をして他人に迷惑を及ぼすやうな行爲があれば、第一に法律が承知せぬから、意氣旺盛な彼等と雖も敢て行り散らすの餘裕がない、殊に近時内外の交通頗る頻繁を極め、外人はドシ／＼來遊するし、日本人も亦盛に海外に出懸けるやうになつたので、自然に彼我の風俗習慣が調和し、餘り粗野横暴な振舞も國家の體面上出來なくなつた。のみならず、人智が發展するに連れ、虚威張なるもの、無意義なことを自覺する様になつた。現時の青年が表面著るしく温順に見えるのは、是等外界の刺戟と、一つは此の自覺の

意氣の銷沈するに非ず

結果に外ならぬので、必ずしも意氣銷沈の結果であるまいと思ふのである。

また或る者の曰ふが如く、現今の青年は困苦窮乏に堪へぬと云ふのも、同じく皮相の見解たるを免かれぬ。成程昔の青年は風雪を侵して道場に通ひ、炎天を意とせず柔道も學んだのだが、今日と雖も恁んなことは尙ほ盛にやつて居るではないか。斯う云ふと、それは青年中の一部分に過ぎぬと辯駁する者もあらう。然し乍ら、昔と雖も、士族階級は青年中の一部分に過ぎなかつた。のみならず、昔は劍道や柔道が達者であれば、飯を食ふに困らなかつた。而して夫れは亦た武士たるもの、唯一の務であつた。即ち士の相場は擊劍や柔道の上手下手で決

まつたものであるが、今では根本的に事情が違つて居る。昔の青年は其地位を得んが爲め、又は衣食の道を得んが爲めに剣道や柔道を行つて居たとも謂へるが、今の青年は單に體育として之を行ふに過ぎない。

よし一步を譲つて、今の青年間に武術が衰へたりとするも、それは青年の意氣銷沈が其の原因でなく、青年の努力すべき目的物に大變化を來した結果である。近い例が、彼の日清日露の兩戰爭に於ける我軍の意氣——以前の我國の歴史に果して彼の二百三高地の激戦の様なものが記されて居るか。あの位に困苦缺乏に堪へて、勇戦奮闘した事績が果してあるか。古の戰爭其他の出來事の記録には、存外懸値が澤山ある。例へば楠公の千早城をば百萬の大軍を以て圍んだとか云つて居

目的物の變化

青年と政治

るが、實際は其の十分の一も有つたか何うか疑はしい。斯の如く懸値あるものを取つて、直ちに今の世の正味のものと比較するから、昔のものは何でも彼でも善く見える。併し乍ら、少しく頭腦を冷靜にして考へて見たならば、昔よりも今の方がズツと偉いことが多い。

更らに或ものは、昔は悲歌慷慨の士が雲の如く起つて國政を痛論したが、今の青年には此憂國の精神がないと云ふ。併し私見を以てすれば、是も矢張淺薄の觀察たるを免れない。天下の政治を論ずるものは却つて現代の方が多しと思ふ。一寸した問題でも起ればもう青年等は公開演説で堂々と議論を闘はして居る。又た之を時代から考へても、

彼の維新頃の老年者の智識は、一般に青年者よりも淺薄で、彼等より五十歩も百歩も後れて居た、従つて言論界に牛耳を執つて居たのは青年で、實に彼等は活動の中心點であつた。所が今日は左様でない。日本の現代は未だ過渡期だとは云ふもの、智識の點は老壯年者の方が確かに進んで居る。青年をして天下國家の事に騒ぎ廻らしめずとも、他に適任者は幾らも居るから、此の際、青年等は、他日自分共に舞臺の廻つて來るのを待ちつゝ、只管勉強さへして居ればよい。又昔と違つて、今は國事に奔走する者を政治家と稱し、一種の專業となり商賣となつて居る。それは、政治なるものには特殊の専門的智識を要するからで、且つ維新の頃には志士といへば藩主などが養つて呉れたが、

今は衣食を自分でしなければならぬから勢ひ斯くの如く區別が立つ様になつた。去り乍ら、之を見て政治家が墮落したと云ふ結論も出て來なければ、又青年が意氣に乏しいと云ふ結論にも到着せぬ。

又た人心が輕佻浮薄に陥つたとか、華奢淫靡に傾いたとか、或は世教が頽廢したとか口癖のやうに云ふ者があるが、此の澆季云々の議論は今に始まつたものでは無い。日本は偕て置き支那あたりでは大昔から聞く聲で、何時の世にも一部の悲觀論者が居て、常に斯く絶叫して居る。併し乍ら、彼等の所謂澆季なるものは、果して何時の世に比較しての言葉であるか、追究すれば殆ど疑問のみで、何等明確な解答も出來まいと思ふ。以上の如く論じ見れば、世の悲觀論者が今の青年の意

一種の感情論

青年謳歌論

氣を云爲し、世道人心の荒廢を云爲するのは、誠に空漠とした、論據の無い、一種の感情論に過ぎないのである。此の感情論は何時の世にもよく流行る奴で、殆ど識者の一顧を値しないと謂つて宜い。

世の批評家は何故恁んな誤解に陥つたのかといふと、それは人類に通有な祖先尊崇の念から來たものと予は解釋する。即ち歴史や口碑に傳つて居る處は昔の良い部分ばかりであるから後世から追想すると、古人の行爲は非常に偉いこと許りであるかの如く思はれる。殊に時代を異にして居ると、愈々其感情が強烈になる。而して其完全無缺な想像と、日常身邊に纏はる缺點だらけの現實とを比較するから、云はゞ理想と實際とが相違する如く、現實が非常に醜く見え小さく見え、惡

祖先崇拜の利害

く見え詰らなく見えて仕舞ふ。評者が現代の青年を蔑視するのは、先づ此感情に先立たれるからで、即ち色眼鏡をかけて物を視ると同じこと、一應の理解ではあるが、眞理では決してない。

併し、此感情も場合に由つては非常に役に立つことがある。即ち我光輝ある歴史に對して斯んなことは出來ぬとか、或は祖先は斯く忠義の爲めに一身を捧げたから、吾人も君國の爲めには一身を犠牲に供さなければならぬといふ偉大な感化力を持つて居る。併し、眞底昔が善かつた様に思ひ込むと、却て弊害を生ずるのである。例へば學校に於ける教育は、總べて古人の善い處許りを摘んで來て、誰々の青年時代は斯くの如く偉かつたとか誰々の少年時代は斯んな勇氣があつたとか

青年謳歌論

いつて、決して其人物の缺點を指摘しない。そこで氣の弱い學生などは、余は到底古人に及ばぬと絶望することもあらう。或は何かの機會に教師が褒めて置いた人物の缺點を見出せば、之を曲解して、大行は細謹を顧みずなどと、進んで悪事を行ふものが出ないとも限らぬ。であるから、教師たる者は斯る場合、宜しく其人物の長所と短所と共に指摘し、是々の缺點が無ければ此の人はモット偉らかつたとか、諸君は斯やうな缺點を持たぬから、其の長所に従つて進めば古人よりも偉大の人物になれるとか説明するが宜い。すれば、學生にも自信力が出て来るから、必ず良結果を奏することだらうと信ずる。家庭にしても同じことで、父兄が子弟に向つて、自分等の少年時代は斯くくであ

つたと自慢話ばかりして聞かせ、お前は臆病でいかぬ。分別が足りないなど、小言を言ふよりも、自己の長所は長所、短所は短所として、偽らぬ告白をして置く必要があると思ふ。

話は横道に這入つたが、最う一つ青年が非難を受けて居る點に就て辯護する道がある。昔の所謂天下の志士など、云はれた連中は、地方から一粒選りにして出したもので、幾百人乃至幾千人中の奇才である。然るに現時交通機關其他の完備と共に、山村僻邑の者と雖も、昔の如く困難と危難とに逢はず、時間と費用とを要せず、容易に場所に出て學問することが出来る。多少の學資さへあれば、秀才は勿論、凡人も、或はコンマ以下の者まで修業に出られるといふ有様であるから昔に比

すれば、勉學する者自身に非常な才能の差異を來して居るのである。夫れを一概に今の青年は駄目だといふのは、迂濶な議論であるまいか強ひて昔の青年と今の青年とを比較して論ずるならば、昔一粒選りに選つた様に、今の青年からも選り抜き、然る後兩者を比較しなければなるまい。さもなくて、頭から大掴みに批評を下すは非常な間違であらうと思ふ。

要するに、現代青年の意氣は決して銷沈して居らぬ。表面靜止的に見ゆるのは、時代が相違して來たのと、東西交通頻繁の結果、昔の粗野な風俗は却て野蠻視される所から自然に今日の傾向に變化したまでである。直ちに之を罵倒して仕舞ふのは、根も葉もない感情論で、大

して意とするには足らぬ。

終りに臨んで、余が特に青年諸君に希望する所は、諸君が現在に處し、又將來に處して行くべき道を十分に考へて、寸時も油斷せず努力せられたいと云ふ簡單なる一語である。勿論、何れの時代に於ても缺點と云ふものはあるから、諸君は宜しく現代の缺點を發見して片端からどしどし之を矯正し、何處までも理想に近づく様に努力して貫ひ度い。余は、將來諸君が第二の國民として、立派に此の日本國を背負つて行けるものと樂觀してゐる。而して夫れ以上の希望を持たぬ。此の希望を以て我輩は今の日本の經營に當り、遠からず之を諸君の手に渡さんとするのである。

父兄の罪乎先輩の罪乎

吾輩は今の青年に對して何も望む事はない。青年に對する希望は？と云ふやうな事をよく聞かれるが、別段希望と云ふほどのものはない。放つて置けばよくなると思つて居る。一體何とか彼とか言つて、口八釜しく餘計な世話を焼くからいかぬのだ。名門に子供が出来るとすると、母はお前はお父さんの様にならなかりやならぬと言ひ、父は己れのやうにならなかりやならぬと云ふ風で、親が偉いから子も偉くなるべきものだとして極めて居るやうな傾きがあるのは少と見當違ひではある

見當違ひ

學者の子
は必ずし
も學者た
するを要
せ

まいか、勿論、誰だつて偉くなる方が宜いには違ひないけれど、人には生れつきといふものがある。大概賢愚は定まつて居る。必ずしも親の通りなれるものではない。随つた大臣の子は、必ずしも大臣にならなかりやならぬと云ふ事はない、學者の子は、必ずしも學者にならなかりやならぬと云ふ事はない。實業家の子は、必ずしも實業家にならなかりやならぬといふ事はない。而して又、馬鹿の子は必ずしも馬鹿にならなかりやならぬと云ふ事はないのである。

處が、親と云ふものは子煩悩で、子供の爲め、家の爲めを思ふ餘り、自分達の定規に當て嵌めて、斯うしなかりやならぬ、あゝしなかりやならぬと極めて仕舞ふ。勿論、子供の爲めに、善良な助言を與へると

父兄の罪乎先輩の罪乎

虚榮心の挑發

父兄の罪乎先輩の罪乎
云ふ事は必要であるが、子供の性質や天分をよく理解せずして、自分達の希望を子供に押し付けようとするから、子供は却つて身を過るものである。親がそんな風だと、また其處に出入するいろんな奴が、坊ちやんは偉いとか、お懶巧だとか言つて子供の虚榮心を挑發する。三つしか力のない者を、五つも六つもあるやうに持ち上げる。それもさうして居る間は無難であるが、其子がイザ實際社會に出て仕事をすると云ふ場合になると、世間はなか／＼言ふ通り買つて呉れない、實際の値打しかない。今迄五つも六つも出来るやうに言はれて居たものが、やつて見ると二つしか出来ないといふので、本人も失望する、苦痛も感ずる。出来る働きも出来ないといふ風になるのである。

人材の出現を阻害す

又彼の忌むべき學閥政治閥なども、丁度之と同じ意味合から出来るものである。あれは何博士の息子であるから、今度はあの倅は大學の教授にでもなるやうにしたら宜からうとか、誰それは親爺が大臣であるから、何々にしなければなるまいとか、言ふやうな事を言つたり、或は何か爲にしようと思ふ所のある奴は、馬鹿をも殿様のやうに、はやし立てるやうな事もする。親もア、であるから、子もアアでなけりやならぬと云ふやうな事を言ふ。實力を計らずして、情實で品定めをする。這麼風で、學問の進歩も、人材の出現も、寧ろ之が爲めに阻害されて居るのである。其癖今日の青年は墮落したとか、或は俊才が出ないとか言つて嘆く、無論俊才が出た方がよい。出なくてはならぬ。併

し出来ないものに出来さなくてはならぬと云うて強付けて出来なかつた時には當人を落膽させ、之に不足を並ぶると云ふが如きは餘りに勝手な話である。それに何かと言ふと昔の人間は偉かつたとか言ふが、之も世の中の事情を知らぬといふものだ。それは昔は藩から選りに擇つて學問をさしたのである。だから偉物が出た。或は大實業家も出たらう。大學者も出たらう。當り前だ、藩の中でも善奴ばかりを選つて學問させたのだから、偉い者が出たのだ。つまり比較的偉い者ばかりが揃つてゐたので、何だか偉い者が多いやうに見えたのだ。

然るに今日では昔と事情を異にして居る。誰でも東京に来る。田舎の田吾作でも、權兵衛でも、皆東京に来て學問をしなけりやならぬも

學問する者が多くなつた

の、やうに思つて遣つて来る。而して人口が殖えた爲めに學問する者が多くなつたと云ふよりも、寧ろ學問する方法が頗る容易に且つ自由になつたからである。學問しても大した見込のないものまでも金があれば出て来て學問をする。友達が學問すると言つては自分も之に倣ふ。何の仕事はよささうだと言つては漫然其學問をする。甚だしきは總ての境遇の許さない者でも飛び出すと云ふ風であるが悪いと云ふのではない賢愚大小様々だと云ふのである。様々であるから人數が多い、随つて昔のやうにこれ／＼の人は學問もなけりやならぬ、これ／＼の人は東京へ行けと言つて居た時代のやうに善い奴ばかりは揃はない。寧ろ平凡な人間が多い。馬鹿も少い。けれどもさういふものが多いから

父兄の罪乎先輩の罪乎

と云つて偉い者が昔より少ないと云ふ理由にはならない。唯學問する者に平凡な人間が多いので偉い者が少ないやうに見えるのである。人が多くなつただけ世の中が進歩した。或は昔よりも偉い人間が多くなつて居るかも知れぬ。偉い人間が具合よく世の表面に現はれて來ないと云ふ事はこれ寧ろ疑ふべきである。

兎に角、吾輩は親たる者、先輩たる者は餘程注意しなければならぬと思ふ。隣の子が學問したから己れの子も學問させなくてはなどと思ふのはいけない、先づ宜しく其青年の性質天分の如何を察し、而して四圍の事情の許す者にして初めて學問すると云ふ風になつて貰ひたい徒らに高等學校とか大學校とかを卒業したと言つて、何にもなるもの

でない。隣りの子は學問して偉くなつた。己れにも子があるから偉くしようと思ふやうな事を考へて大學を卒業させる。卒業した所が月給は三十圓で、好い口はないと云ふ事になる、そこで親も窮すれば子も困る。親が強ひて學問させたけれども、子供は一向偉くならぬ。それが爲に煩悶して華嚴の瀧に行くとか、ヤケ糞になつて墮落するとかするやうな事になる。即ち之も親や先輩の舵の取りやうが悪いからである。學問さへすれば宜いやうに思つて我もくと東京に出るやうにするから、自然に田舎が荒廢すると云ふやうな聲を聞くのである。

勿論文明の今日であるから、國民として教育がなくてはならぬ。商賣人も百姓も、ある程度まで學問が必要である。それが爲めに地方に

普通の人は
高等教育の
要

父兄の罪乎先輩の罪乎

三二八

中學がある。中學位、即ち普通教育があれば十分ではないか、其れ以上
に學問する人間は、特殊の目的で學者になるとか、又は高等學問を
しなければ仕事が出来ないと云ふやうな人間で、斯いふ人は學問しな
けりやならぬけれども、普通の人間は、さう學問をする必要はないの
である。そこで地方に居る人は、青年會とか云ふやうな一の團體を作
つて、時々學者とか、其他の人物を聘して、新時代に處する心得に就
て講話など聞けば、それで十分である。其外各種の雜誌も讀まれる、書
籍も求めれば容易に得られる。兎に角こんな風にして地方で一生懸命
働いたならば國家の利益にもなるし又青年自ら身を過るといふやうな
事もない。随つて學校を卒業したけれども職業がないなど、嘆ずる必

家で仕事
をやるも
よい

要もないのである。

又多くの人は、學校を出ると直ぐ何かにならねばなりやならないやう
に思ふから、職業がないなど、云ふやうな事を云ふのである。尤も金
が充分あつて學問する者ばかりでないから學校を出たら直ぐ何かにな
らねばなりや困るであらう。然し是非共ならねばなりやならぬと言つて騒
ぐのが間違つて居る。家で仕事をやつても宜いではないか。それが大
學なんか餘り高い學問をするから、田舎に歸るのがいやになるのであ
る、其れが爲に次第に地方が荒廢し、都會にのみ人が集まつて、結局
腐敗すると云ふ事になるのである。折角學問した有望の青年が、却て墮
落すると云ふ事になるのである。吾輩の云ふやうにさへすれば、職業

父兄の罪乎先輩の罪乎

三二九

問題などと云ふ事は何でもないのである。青年に向つて、大に働かな
けりやならぬ、自己の本分を守らなけりやならぬ、勤勉でなけりやな
らぬと云ふのは宜いけれども、己れは斯うして偉くなつたのだから、
お前も斯うして偉くならなけりやならぬなど云ふのは大に間違つて
居ると思ふ。

勿論今日は時勢が時勢で、日本も世界的競争場裡に立つて居るの
であるから、田舎にばかりグヅ／＼して居らずに、海外に向つても大
に出て行く意氣がなければならぬといふ事は言ふまでもない。

新人材の訓練

情實で事
を處せず

世間の人は我輩が部下を引援するといふ様なことを噂するものがある
さうだが、我輩は決してそんなことをせぬ。いくら引上げようと思
つても、力の足らぬものは仕方がないぢやないか。任に堪へぬものを
其位置に据ゑても仕事が出来なくなつて仕舞ふ。我輩はそんな情實で
事を處せんとは思はぬ。

成る程我輩の下に居たもので大きくなつたものはある。来た時に比
べると人物がスツカリ變つたと思ふものもないではない。蓋し人間は
新人材の訓練

新人材の訓練
 上に立つ人の使ひ様一つで人物を大きくすることも出来れば、潰して縮めて仕舞ふことも出来る。併しこれとても新しく作り出すのでない。相當の力を持つて居るが、内部に潜んで居るのを外に發揮させ活動させるといふのである。使ひ様の巧妙な人は能く此の潜んで居る力を發揮させる。要するに自身の材幹七分外授三分位のものかね——假令日夕親炙感化の功を與へられても駄目なものもあり。瞬間一事感化啓迪を終身利用し、一世に樹功の資となすものもあるではないか。
 元來人間といふものは半面は神に近く、半面には獸類に近き性を帯ぶるが故にすぐれた人でも動物的な處を免れぬものである。自分よりも下にあるもの、弱いものは之を可愛がりどしく引立て、やむが、

段々位置が上り力が加はり自分と同等にならうとすると之を邪魔にする一種の嫉妬心を以て之を排斥せんとしたがる。之れは人間に免れぬ缺點である。犬や猫は自分が産んだ子を非常に可愛がる。小さい間は之を舐めたり、咬へたりして之を愛し、或は敵の攻撃より之を保護する。見るからに其愛情の濃なるに感心する、然るにこれが段々大きくなるに従ひ、其愛情が薄らいで来る。其子が終に自分と同等になれば殆ど愛情が見えぬ。出合がしらに眼を瞋らしウツと唸りつける。若し眼前に食物でもある時は子は親を排し、親は子を除かんとして相争ふ様は殆ど仇敵と異らぬ。動物ながらも實に憐れむべきものである。前に小さかつたものを可愛がつた趣、少しも見えぬ。人間が其部下の大きく

新人材の訓練

なり強くなるのを嫉むのはこの犬猫等の動物が其子の成長したのを敵視するのと異はない。どうしても人間は動物たるを免れぬ。

此點は人を使ふものゝ大に注意を要する所である。大きくなれば之を排斥せんとする傾がある様では到底人を使ひこなすことは出来ぬ。大きくなればなる程大切に之を遇して其能力を發揮させねばならぬ。同等の人を嫉むことは人間一般に通ずる缺點であるが、上に立つ人は必ず其弊に陥らぬ様に心がける必要がある。

又人を使ふものは、部下の反對抗議を容れるだけの度量を有たねばならぬ。長上に反對抗議でもする位の人物でなければ、決して仕事の出来るものでない。成程無暗に反對抗議することは缺點かも知れぬ。

併し缺點だからとて之を抑制すれば部下は只命これ従ふものとなり、一の機械たるに過ぎなくなる。故に人を使ふものは部下の進言に耳を假すだけの度量がなければならぬ。又反對抗議を排斥する力なければならぬ。否時に非常なる力を以て叩き付けて試みることも再三に及ぶべき必要もある。反抗心なきものは味方としても有力なるものでない。自分のやつたことを一點一畫も改良せず、只命令通りにやつて行くのでは仕事が出来ぬ、假令長上の人やつたことでも失當である少くとも善き方法があると見れば之を改めんとする位の見識なければ仕事を託されぬではないか。又善き方法と見れば之を研究し出す位の人でなければ役に立たぬ。役に立つ人を使ふに總て自分の鑄型、型式にのみ

打込む様ではダメである。

『あなたのズボンは尻の部分が切れて居ます』

といはれたなら、

『さうか、よく知らせて呉れた、早速縫はう』

といふ位の度量が欲しい。さすれば部下も喜んで、

『それでは私が縫つて上げませう』

といひ、

『では頼まう』

といふことになる。かうして上下の間が美はしく融和して始めて長上は部下に依つて其短所を補ひ、部下は長上を得て其手腕を發揮する

再び忠告
する勇氣
を失ふ

ことが出来るのである。

もし注意を與へられた場合に、殊更に、

『いや破れて居るのは知つて居る、あれは用便の爲に態と開けてあるのだ』

といへば折角の忠告も全く其効を失ひ、再び忠告する勇氣を失ふに

至るであらう。又

『君のネクタイは曲つて居る』

といはれた時、

『さうか、有難う』

といつて正せば忠言した人も快く感じ、忠言の甲斐あつたことを喜

ぶ。併し若し

『それは知つて居る。わざとさうして居るのだ』

といつて直さうとしなければ忠言も挫かれるであらう。小事些末の場合には格別の故障もない様であるが、少しく大なる問題の解決に逢ふときに頗る狭量では到底人をして其全能力を發揮せしむることが出来ぬ。故に善惡に拘らず、成否の如何を問はず兎も角他の忠言に耳を傾くるだけの雅量を有せねばならぬ。

又部下の人物を大きくし、其能力を發達せしめるには、常に人物相應に、能力に適するやうな重荷を與ふるが可い。人間の能力は練磨すればする程潜んで居た力が發揮され、大きくなるものである。而して

人物相應な重荷

弾力なきもの

これが爲めには順次に重責に當らせるがよい。例へば此男ならば一貫目位の重に堪へるであらうと思つたら一貫目を荷はせると立派に之を遣り抜ける。夫れから二貫目とする。二貫目もやり遂げる。三貫目四貫目といふ様に段々と重荷を加へて行く。弾力ある人ならば段々重荷を加へられるにつれて之に堪へる力を鍛錬し、後には五貫目でも十貫目でも立派に荷ふことになる。狂犬毒の豫防注射を行ふ様なものだ。尤も使はれる人が總てかういふやうに弾力に富んで居るとは限らぬ。重荷を與へると潰れて仕舞ふものもある。又中には之れならばと見込をつけたものが外れるやうな事がないでもない。例へば此男ならば必ず重責に堪へるであらうと信じて居たものが、愈々一段重いことをやらせ

人を使ふ
者に用ふる

新人材の訓練
三〇

ると存外に堪へる力がない。ピシヤリ潰れて起き返へる力のないものがある。如何に注意しても神ならぬ身の見込外れを生ずることは免れぬ。弾力のないものでも其現在の地位に置けば立派にやつていけるが重荷を加へれば潰されて役に立たなくなる。即ち現在の儘にすると其人の能力を發揮せしむる所以である。併し之に反し弾力あるものに時重荷を加へて鍛錬すれば其人物は益々大きくなり其能力は愈々發揮される。適才を適所に置くことは斯の如くして出来るのであらう。故に人を使ふものは古來の諺の如く人に使はるゝので、能く部下の弾力あるものとなし、夫に訓練を加へて能力を發揮せしむるに注意せねばならぬ。所謂人を觀るの明を具ふることが必要となる

自分を使ふ人
を養成する
ので、
自分が使
ふ人を
養成する
のでな
いといふ、
大徳義心
が公人に
必要であ
るまいか。

現代要求の人物

近來は世人が非常に個人主義に傾いて來た。舉世滔々として利に趨くと云ふ有様で、個人主義者にあらざる人にして人に非ずの感がある。然し茲に謂ふ個人主義は學者の云ふが如き意味の個人主義ではない、淺浮輕薄なる個人主義である。一體今の人は「自己」と云ふものより外に何物も考へて居ない。あらゆる事物に對して自己を基礎として打算して居る。己を以て人を律するのは個人主義の通弊である。人の難に就いて之を助けるなどいふ義侠心もなければ、大にしては國家の

淺薄なる個人主義

日本人は近視眼なり

休戚を想ひ社會百年の計を憂ふる者などは藥にし度もない、眼中唯「自己」あるのみで國家の權威も社會道德の標準も渠等に於てゼロである。個人主義の害毒の及ぶ所、亂臣賊子よりも甚だしきものがある。斯の如き惡風潮は何處から醸し來つたものであらうか、我輩は是れ實に近時の最も重要な社會問題である所の生活難より來れるものと斷定するより外はない。日本人は近視眼である。島國根性の然らしむる所か知らぬが、どうも着眼點が小さくて困る。國民性に雄渾莊重と云ふ趣を缺いて居る。従つて動もすれば蝸牛角上の争を好む癖があつて互に小城壁を造り、個人主義の思想に傾きたがる、形體のみ徒らに大國民化しても、國民が各人各個に右する者もあり左する者もあるといふ風で

現代要求の人物

は統一といふ國家有終の美を完うすることは到底出来ない。今に於て天下の有識者は一齊に起りて此亡國的風潮の絶滅を期さなければならぬ。個人主義の聲が天下に満つるに至つたならば、國家は如何にして立つて行けるか。現代に於て最も恐るべき思想は個人主義である。

曾て福澤諭吉先生は拜金宗を唱へられた。當時の社會狀態に鑑みたならば拜金宗は大に時宜に適した卓論であつたのである。併し今日では時代が一轉化した、拜金宗は今日に於ては寧ろ國家の大本を誤るものとなつた。黄金が横行する所天下何物と雖も風靡せざるはない。倫理も道徳も正義も一片の黄白の前に降伏して了つた。福澤先生は時事に鑑みる所あつて大に拜金主義を主唱されたのであるが、世人は之

拜金宗

實利主義

を曲解して寧ろ需用して居るやうに思はれる。米國と日本とは根本的に國體を異にして居る、而も所謂アメリカニズムなる輕薄なる個人主義的風潮が拜金主義と共に其國民道徳の神聖を汚瀆しつゝあるは慨嘆の至である。帝國大學の學者の一部では一時盛んに、獨逸系統の實利主義を唱へたともあつた。何人も實利の重んずべきは當然であるが、實利主義が墮落して利己主義となり我利々々主義とならうとは學者達も思ひ及ばなかつたであらう。要するに拜金主義も實利主義も或る時代の病弊に應ずる一投藥法としては良いか知らぬが、確かに近代の亡國病たる個人主義の惡思潮を助長した罪は免れない。吾輩は時代思潮と教育制度の關係を思ふ毎に現代日本に於ける學制改革の必要を感ず

現代要求の人物 三三六

るものである。今まで國民の夢にすら見なかつた個人主義などの思潮が出現するのは學術が些か弛廢して來た結果ではあるまいか、果して然らば教育家たる者は奮勵一番せねばならぬ。

今の人は働かない、徒手遊食の民が多い、人間は元來働くやうに造られて居る、努力は我等の先天性である。名譽を希うたり富貴を求めたり、自己の本領を飛び離れて眼高手低望むべからざるものを望むから、理想と現實と伴ふことが出來ず、徒らに悲觀の極に立到るのである。近來の時代病たる彼の社會主義なども皆努力の眞意義を解せざるの徒の唱道する所である。努力することが面白くて堪らずに努力するのでなくては眞に『働き人』と云ふことは出來ない。社會主義者などの

意氣地なしは死んでも生きても國家の休戚には關せない。國家社會に必要な人物は、所謂有爲の士である。有爲の士とは自己の本領を格守して奮闘努力一日も撓まざるの人である。國民が皆有爲の士を以て満された時始めて賢實なる國運の基礎が築かれるのである。

今の人は報酬を口にして恬として恥ぢない。我等は渾身の勇氣を持して事に當らねばならぬ。働きさへすればよい。未だ事の成否も分らない中に報酬のみ口にするのは堂々たる男子の恥づる所である。現代の要求する人間は、能く働く人間である。働く者がなくては國家が立つて行かない。我輩と雖隨分職業を持つてゐる。各方面に亘つて隨分忙しい。併し報酬なるものは少しもない。あるとすれば悪口位のも

現代要求の人物 三三七

現代要求の人物

のである。而も吾輩は一日と雖も休息を希つたり報酬などを口にしたことはない。世間で能く『百年の計』と言ふが、其意味は百年の後成就すると云ふのではない。百年後には再び同じ事業を爲すものがあるといふ意である。楠正成の七生報國も此意味に外ならぬ。知己は千載の後に現はるればよいのである。即ち人は職務と同化しなければならぬ。職務其ものが已に快樂でなくてはならぬ。同化唯それのみである。報酬を望まずして能く職務を同化する故着々として事務は進行する。戦争も同じである。職務に忠實ならんが爲めには名譽も野心も戀も何もかも犠牲にせねばならぬ時がある。事務が多ければ多いほど、吾等は活動の餘地を持つて居るのである。コキ使はれるなど、不平を抱く

者は斷じて職務に忠實な人間でなく、従つて有爲の士といふことは出来な

成功の源泉は自信力

得意時代
と失意時代

人は其得意時代と失意時代とで、多くは其舉止を異にするもので、得意時代には意氣軒昂乃ち肩で風切るものが多い。かゝる人物は大抵凡骨であつて、探るに足らないものである。

眞の傑物は其成敗利鈍によりて、斯くも目に見えた舉措を示さないのが普通である。否失意時代に於て一段の奮勵心を喚起すると同時に、得意時代になる程、其不平が増長するものだ。やゝ其位置を得て喜悅満面たるものは、全く小成に満足する小器であるのだ。

自信力

何故に人傑は其得意と失意とで、毫も其舉動を改めぬかと云ふに、そこには自信力といふ一種大なる精力があるからだ。よく云ふ事ではあるが、六の反面は一だ、辭令の裏面には休免の二字が潜んでゐる。此眞理を解し得ないものが、其得意失意で、大に舉動を異にするのである。

此く云ふと可笑しいやうであるが、自分は此自信力が非常に強いつもりで、失意の時にも洒々落落たるものであつたが、更に少しく意を得るやうになると猶一段の不平が昂まつて来る。此の不平が即ち精勵を生んで、次第に其位置を向上させることが出来た。

其處で熟々思ふのは、人間は自ら求めて位置を作るべきものでない。成功の源泉は自信力

運命開拓
の意義

成功の源泉は自信力
三三三

唯一の自信力を保つて、銳意精勵したならば、地位はやがて向ふから訪れて来るものと信ずる。世間では或は自分の今日あるに至つたのを目して、自ら運動し自ら吹聴して、其位置を高めたかに解するものもあるが、其は全く誤解で、自分から求めて椅子を轉じることはない。自信精勵するのなかつたならば、假令如何に焦つて運動した處で、人は決して採用して呉れるものではない。

往々世間で自己の運命は自分自身で之を開くべしなど唱へて、無暗に運動するものがある。之は自ら開拓するといふ意義を取違へて居ると思ふ、其れ丈の實力技術もなくして、運動した處で、誰れが引立てるものがあるか、自ら開拓するといふのは、唯其技術見識を高め、

今の議員

自信力を篤くすると云ふに存するのである。

今の議員と云ふ連中を見るに、眞に國民から推し立てられたものがない。自ら求めて而も運動費を使つてヤツト議員に擧げて貰ふ、それだから又更に議長にならうと運動する。人に謠はれない先に、自ら自分のことを囁し立てる。して云ふ所を聞けば、國家の爲めに其の抱負を實行するの、イヤ乃公立たずんば蒼生を奈何など、頗るヤニ下がつて居るが、國家の爲めやら、自己の爲めやら、殆ど甄別が出来るものではない。

要するに自ら忠良を装ふと云ふは、最も慎むべき行爲で、本體は是非至誠と自信とにあらねばならぬ。併し先輩者にして其の本末を誤る

成功の源泉は自信力

成功の母

成功の源泉は自信力
ものが多いたは、實に患ふべき現象であつて、青年者に悪感化を與へることも非常であると考へる。
世の中には辭令の裏面が讀めぬ役人や、賽の反面の見えぬ博徒が澤山である。是等の間に立つて行くから、確かに自信力を持つ意志確乎たる人が目立つのである。平凡に甘する積であるならはいざ知らず、少しく頭抜けようと思へば、是非精力主義で、自ら自己を信じて奮勵するの外はない。自信力は即ち成功の母であつて、又自己の運命を開拓するの天使であることを思ひ、充分に克己の精力を涵養するのが、青年の急務であると信する。

意志の薄弱なる理由

鞏固なる意志

世上何故意志の薄弱なるもの多きか、理由は固より一ならねども、若し主なる理由ともいふべきものを求めたならば、精細なる科學的知識、換言すれば論理的知識を缺き、之と同時に小利害を見て、之に移るに敏なるが如き其一に居るであらう。科學的——論理的知識を缺いた者の考案計畫施設は全然夢想的であり、思想に統一なく從て定見なく、門を出で、其向ふ所を知らざるが如き類なるを以て、一たび困難に際會すれば、忽ち甲を捨て、乙を取りて自ら怪しまない。又小利害

鞏固なる意志

を見るに敏なるものは、最後の利害は暫く措いて問はず、一時眼前の光景我に利あらざることを察知すれば、少しく自己に利益なるものを求めて之に轉ずる。一たび轉じ、再び轉じ、斯くして底止する所を知らざる、所謂移り氣を發し易いもの、處世上成功せし例は未だ曾てない。

此等の人物は意思の薄弱であると言ふよりも、其精神上に於て缺くる所あり、人生觀の立て方に於て誤りがある。既に修養を缺き、人生觀の立て方に於て誤りがある故に、困難に對して奮闘し、奮闘の結果たる成功を收め得べき資質なるものにして、空しく失敗者たるに了る者が多い。實に悲しむべき事である。

稟性上
意志薄弱な
るもの

以上は個人修養上の缺陷より來れる意思薄弱なるもの、一例であるが、實は稟性上其意思薄弱にして、殆んど獨自一個を有せざるものを天分に於て意思鐵の如きものと同様に堅固ならしむるのは至難であるが、斯く稟性上意思の薄弱なる者でも心掛如何に依つては、意思の天分に於て堅固たるものに劣らぬ事業を成し得るであらう。如何にすれば其目的を達すべきかは大に研究の價がある。

其意思稟性上薄弱なる者の、事に臨んで能く成功する所以の道は

第一 健全なる論理的思想を涵養すべし。

第二 遠大の利害を念とし、眼前の小利害を顧みざるべし。

第三 朝に甲を取り、夕に乙に移る者は、其人の實際的智識に於て

鞏固なる意志

老熟の境に進む事能はざるのみならず、其人の社會的信用は零にして、常に其身の榮達を圖るべき機會を失ひ、従つて變轉極まりなく、意思薄弱なる形となるべし。故に馬車馬の如く一條の徑路を辿りて最後迄前進せよ。

此の如き用意決心のある者も、往々にして一難に遇へば忽ち挫折し少しも男一匹の氣概ない者の多きは、實は今日の社會的状態が之を然らしむるのである。日本の青年は意思一般に薄弱であるとの説は信ずることは出来ない。是れ日本の青年を咎めるよりも、先づ日本の社會的狀態如何を考へなければならぬ。過渡の時代に於ける常態として、生存競争未だ左程に激烈でない、假令甲の職を失つても直にこの

地位に就く事が容易であるから、蹉躓を忍んで迄も其素志を貫徹せねばならぬ要は見ない。故に直に去て新に職を求むる。社會は常に個人を感化する。今後生活の状態は愈々困難となつて、一たび職を失へば溝壑に轉死するの外ない如く、いやが上にも、せち辛い社會となれば何人も我儘を敢てせず、一定の事業に固着する美風を生ずるに至るであらう。是れ社會上より見ても健全なる發達を遂ぐる所以であつて、一個人としても、意志堅固なる、所謂克己心の強い人物となり得るのである。古來弱者の却て大事を成す状があるのは、畢竟其精神上の修養深くして、世に處するの道を誤らなかつたからである。

人は失望すれば多くは其志を一變する。然れども是れ必ずしも意

志の薄弱なるが爲めでなく、事業に對する用意に於て缺くる所のある故である。成敗は初めより期せられない。成功を必して失敗を招く場合は固より多い。斯く失敗を招いた場合に於て、如何にして泰然之に處し、冷然之を一瞥に附して重ねて奮進するの勇氣を蓄ふべきであつて、其法は他にない、事業に着手する初め、滿腔の熱血を濺いで奮闘力行するは言ふまでもないけれども、其結果は大失敗を招く事があらうと覺悟するに在る。志は特に遠大なるを期して、身邊の小成敗を眼中に置かざるの抱負がなければならぬ。最大の不結果に比すれば、世人の區々の毀譽褒貶の如きは、何等意に介するに足らぬ。此用意を以て一切の事業を見よ、如何なる苦痛困難不幸に際會しても卓犖の意氣

尙ほ中に磅礴して更に目覺まして奮闘努力を繼續するを得るであらう。現今諸會社の事業經營方針は、多くは其見る所極めて近距離である僅に一年二年の後を標準として十年二十年の將來を察しない。少しく利益あるを見れば忽ち高率の利益を配當せんことを力めて、更に遠大の目的の爲めに之を利用せんとするの計をたてない。此の如き會社は一時は有利の如く見ゆるけれども、最後の勝利は決して此徒の收むる所でない、若し不幸にして大打撃を蒙むる事があつたならば、一朝にして土崩瓦解するものは、要するに持久的經營でないからである。此の如き會社は會社としての意志が甚だ薄弱なるを證するものである。個人として意志を堅固ならしむべき要があるとすれば、會社としても

亦意思を堅固ならしめねばならぬ。意思の堅固なる會社でなければ、決して最後に又最大なる利益を收むる事が出来ぬ。敢て實業界の先輩に望む。速に如是不健全なる氣風を一掃し、一般會社をして遠大なる目的の爲めに事業を經營せしむるに其力を致されん事を。

日本人は決して意思薄弱の國民でない。過去數年間に於ける活動は天下至難の事業に對して、能く考慮し能く奮闘し得る實例を示したものである。個人としても各自能く如何に向上的傾向を示しつゝなるかは社會上一般の現象に徴して明かである。社會は個人に對し或る意味に於て其意思を堅固にし、克己心を強健ならしめん事を要求して止まないものである。生活の困難苦痛は寧ろ人生の向上傾向を鼓吹するの意

に解釋して可い。此傾向と奮闘して後始めて進歩あり成功あり、愉快あり、人生の意義を遺憾なく發揮するを得るのである。所謂樂天的精神は這間に於て活動する勇士にして始めて之を其胸間に點出すべきものである。

處世の根本義

眞の一字

一言を以て之を語れば男兒處世の根本義は眞の一字に歸着するのである。従つて成業の要素も此一字に歸着する。智慧の働きを以てすれば如何様にも潤飾せられるが、眞の一字に缺くるところあつては到底成功するものでない。愚は愚、賢は賢、各眞の一字によつて夫れ々の方面に向つて活動する事が肝要である。

従つて事業を經營するにも、第一着に自己は其の事業に對して眞實を有するや否やを眞面目に考察して掛らねばならぬ。既に眞實を基礎

物事を隠すな

として着手した上は、衷心常に吹々如何なる盤根錯節に遭逢しても平然と之に處することが出来るのである。眞實を基礎とする決心がないと如何に謹慎の人でも、又、綿密な人でも、事業其ものに對して不謹慎で忠實の働を表はすといふ事は出来ない。故に青年の業に志す所のものは、須らく處世の根柢たる眞の修養と云ふ事を怠らず、茲に惡を惡とし、善を善とするの習慣を培養しなければならぬ。

第一青年時代に物事を隠すといふ事は一番宜くない。畢竟、其の隠すといふ心理的狀態には、其人の意志が薄弱で、只胡魔化して事を濟まさうとする卑劣心を有するを證明するのである。従つて眞實といふ事が、其心の根柢となつてゐないのである。故に、人は其の少年時代

から一生を通じて眞實を基礎とし、父母に、兄弟に、朋友に、國家に、社會に對しなければならぬ。少年時代から隱匿之れ事とし、父母にも言へぬ親戚にも語られぬと言ふが如き根性では、遂に終生癒す可からざるの惰性となつて、一生を空過するに至るのである。彼兒は幼少から癖が悪かつた、或は無遠慮であつたといふが如きは、要するに多くは少年時代に於て眞實の根本的修養を怠つた結果である。

眞實即ち誠の心が強ければ道義的勢力も自から横溢し來つて、過は過として之を改め、誰の前でも包み隠さず言ふ事が出来るやうになる、何處の親でも眞實を否定して嘘を吐くと云ふやうな馬鹿な教訓を垂れるものはない。然るに實際の躰方に於て、此眞實ならしむ可き教

訓の往々閑却せらるゝは、要するに家庭の師父たるものゝ不注意である。何うか此點に向つて十分なる注意を拂つて、如何なる困難失策に逢つても眞實が動かぬといふ根柢を培養することにしたものだ。此の眞實の蓄積した結果は世に處して至大至高なる勢力を發揮するに至るものである。

即ち其長じて自から事業を計畫するに至つても、眞實といふ事を基礎として先づ其の企つるところの成功的方面のみを考へず、失敗したら何うするといふ事にも着眼して懸るが善い。斯く兩方面を觀て懸りさへすれば、眞實を基礎とした覺悟があるから、事務に向つては自ら忠實に立ち働き、縦令ば不幸にして失敗する事があつても、未練の振

處世の根本義

舞を爲さず、失敗中にも教訓を得て新生命を開拓し、終始一貫の主義を以て處し去ることが出来るのである。

誠から出た嘘は善いが、嘘から出た誠はいかない。例へば人が虚飾の衣裳を着てゐる時は其赤裸々の真相を觀破する事は六ヶ敷い。其真相は赤裸々の處にあるのだ。蓋棺後始めて定まるといふ語は、要するに箇中の消息を道破したものであらう。失敗も擴げて見せるといふ時眞實を以て事を處したか、何うかと云ふ事も明瞭になつて、始めて其人の人格が現はれるのである。眞實を基礎としなければ一敗地に塗れてヘコタレて仕舞ふ。眞實を基礎とすればこそ、忍耐も出来、奮闘も出来るのである。従つて策窮した時、尙ほ略を以て立つ事が出来るの

である。世の中に大膽な人があるが、眞の大膽と云ふ事は固と小心から起るので、小心能く人をして剛膽ならしむるのである。

要するに、人間の弱點は只其表面を飾るといふ事である。之を吾人の日常生活に譬ふるに交際上禮儀として衣冠を飾る場合もあらう、即ち飾るべき實質のあつて飾るのは敢て咎めない。約言すれば、赤裸々の身を以て天の與ふる美質と寒熱に堪ふるの實質あつて、『シルクハット』を冠むる可なり、『フロックコート』を着くる可なり。されど實質なく只表面を飾るといふは、醜態極まる婦人が、白粉をコテ／＼と塗りつけたやうなもので、醜態をして愈々醜ならしむるのみである。こは要するに磨かざる上にやるからである。人の世に處するも亦然りて

● 衝突して
却て斷金
るの友とな

處世の根本義

表面を飾る心、實に醜陋の極である。然るに赤裸々世に處するといふは眞實の働きて、切言すれば全く信念の働きてある。眞實を基として世に處すれば、時として衝突するも可なり、相結ぶも可なり、不幸衝突するも其の衝突に厭味がない、衝突して却て斷金の友となるものもある。それは要するに眞から出た結果である。

斯くすれば人に接しても缺點を見られて困るといふ事はなくなる。従つて人も自から其眞實を認めて呉れる。然るに何日までも其の缺點を隠し切れるものと思つて、彌縫し、糊塗し、胡魔化し、虚飾するものが、第一間違ひである。如何に天下に卓越する人物も到底其缺點を隠し切れるものでない。例へば周囲の批評的眼光はさながら日光のやう

● 憐むべき

なものである。上下四方到る處から映射して来る。然るに之を隠さんとするは全く手品師的の處世流で憐むべき骨頂である。然るに能く自己の不能は不能として虚飾の衣冠を着けず、眞實を基礎として住けば他人は其の缺陷を補つて呉れる。従つて完全なものとなるが、自分は缺點がないと自惚れて得意がつてゐる先生は、全く自己の着物に皺の寄つて居ることを御承知なく全く以て寄つてゐないと頑張ると同様である、誰か斯る人物に對して其皺を直し呉れるものがあらうか、人の世に處するに往々之に類するの弱點がある。豪放過激な人でも、婦人や兒女の之になつくといふのは、歸るところ其人に眞實を基礎とせる爛漫たる天真の妙味があつて、自から徳を生ずるからである、子供など

處世の根本義

には最もよく其眞實そのしんじつが分るのである。眞實しんじつの勢力は實じつに至大なるものである。濃厚篤實おんこうとくじつの士も之を基もととしなければならぬ。潤達勇略くわつたつゆうりやくの士も之を基もととしなければならぬ。要するに眞實しんじつは人間修養じんけんしうやうの基礎きそで潤達くわつたつと云ひ、濃厚おんこうといふは其の性質せいしつの相違さうゐに依つて種々の性格せいかくを發揮はつきするのである。

澆季けうきと云ふ事は能く人の云ふ事ことで、殊ことに今の青年せいねんはいかぬとか何なんとかいふものがあるが、澆季けうきと云ひ、青年せいねんの疎暴そぼうといふが如ごときは、古ふるびた文句もんくで、予よの如ごときも物心ものごころづいて以來いらい随分ずいぶん聽きかされたのであるが、何なんもさうクヨクと悲觀ひくわんするには及およばまい。此等これらは要するに青年せいねんを失望しつぱつせしむるやうな事を云つて、言ふもの其人そのひとは有徳家いうとくかを以て自らみづか之これに任にん

先輩の不徳

じて居るが、存外ぞんぐわいかゝる注意ちういをするもので、往々馬脚ばきゃくを顯あらはして、十年ねんの後は却かへつて青年せいねんに其缺陷そのけつかんを見出みだされる人もあるやうだ。

殊ことに自己じこが多少たせうの地位ちゐを占めて居る爲めに、地位ちゐを利用して不眞ふしんの心こころから、或あるは人を世話せわしたりなどした揚句あひく、其の青年せいねんが意いの如ごとくならないと、不徳義ふとくぎとか何なんとかいやなことを言ふものがある。しかし、能く分析ぶんせきすると其先輩そのせんはいたる者ものが青年せいねんの發達進歩はつたつしんぽを忌むといふ感情かんじやうから來たものが多いので、能く聞いて見ると存外ぞんぐわい恩おんに着せる程ほどの事こともないのである。固もとく人ひとを世話せわして報酬ほうじゆを得ようとするのが眞實しんじつならざる心こころから來てゐるので惡徳あくとく之これより甚はなはだしきはないのであらうと思ふ。かゝる卑劣ひれつなる根性こんじやうを有する者ものの常つねとして、自分じぶんの本領ほんりやうを明あきにし且

處世の根本義
三六四
つ信實を守るものよりは、グヅラム、養え切れない人物及び不信でも當らず、障らず、圓滿にするやうな輩を喜ぶから、何事に於ても部下の者は八方美人政略となつて、公私共に事を誤まるのである。
輓近智育の發達に伴つて従前に比較すると、種々なる惡智慧も出來たらうが、一面善い智慧も益々發達してゐるのである。只代々不眞實の遺傳がある。其れを撲滅しなければならぬ。社會の生存競争が激しくなつても、眞實は最後の勝利者であるを忘れてはならぬ。
滿天下の青年よ、正直にして賢なれ、愚直ではいかない。愚直を粧うてやらうとするは益々いかない。賢いといふ者には狡猾者が多い。實に賢明で良知のあるものは少い。少いから善いのである。賢にして

眞なきものは狡猾となり、愚にして眞なきものは語るに足らないものである。賢愚を論ぜず、眞實といふ事は、畢竟男兒處世の根本義である。始終眞實なれ、人と交り或は書を讀むに當つても努めて眞實を求めなければならぬ。豊臣秀吉は智謀を以て天下を風靡した。しかし、彼には大に眞實の點がある。近くは大書を成就したコロマーの如き、ルーズベルトの如きに就ても、其の眞實の點を見出して行く事が必要である。自己の衷心に誠あれば、信あるものと、信なきものとは、自から辨別せらるゝのである。要するに、幾多英雄の事業、眞實は主である。智謀は客である。信あつての權略は止むを得ぬこともある。然るに自己の心に眞實なく、所謂權謀術數の眼を以て、太閤なり其他の

歴史家の誤解

處世の根本義
三六六
偉人の事業を見ると、萬事權謀術數の様に見えて、其主要的成分たる眞實を見る事は出来ない。其は自己其物が權謀術數といふ色眼鏡を以てゐるからである。従つて讀書萬卷得る所はないのである。其心眞に眞實を求むるに忠なれば、幾多人物の事蹟に其眞實を發見して修養の上に至大なる効果を奏するものである。
兎角人物の事業が、權略一方のみにて成就したと思ふは、其事實を看取しない歴史家の誤解から來たものであらう。學者とか文人とか云ふ輩には却て往々眞實のないものがある。従つて誤解は幾らもある。彼の徳川家康の如きも狡猾にして只管智謀を弄したかのやうに傳へられてゐるが、其の眞相は能く詮索して見なければ解らない。秀吉の事

好漢、好漢を知る

業は講談師の材料として如何にも面白い。權謀術數、當意即妙、虚々實實、權略一點張の如く知られてゐるが、其處が眞實の點を看取しない研究の弊である。殊に支那人の如く、英雄人を欺くといふやうな淺薄な解釋を根據として立論すると大變な間違を惹起するのである。古來、好漢好漢を識るといふが、古今同一轍で、今日とても人を知るといふことは面倒である。で歴史を讀むにも注意して其の眞實の點を學ぶ事が肝要である。
要するに眞實は、處世の寶である。人格を養成する寶である。志ある青年は、讀書の際にも社會交際の間にも、造次にも、顛沛にも、忠實に之を求めるといふ事が肝要であると思ふ。

處世の根本義

現時の青年は古の青年に比して懦弱なるか

三八

現時の青年は古の青年に 比して懦弱なるか

近來、世人の云ふ所を聞くに、今の青年は古の青年に比して、或は體力が劣弱であるとか、或は素行が修らぬとか、懦弱であるとかいふけれども、吾輩は更に左様信じないのである。かくいふと、今の青年に阿ねるやうに聞えるかも知れないが、吾輩は、眞にさう信じて居るのである。自分の若い時は、今よりは善かつたといふことは、何れの爺さんも、媪さんも、よくいふことで、若し世人の言ふが如く、今の

不健全な
る細胞

青年が懦弱であれば、日本帝國は、かくの如く決して進まない筈である。然るに、事實がさうでないのは、新陳代謝の間に、漸次良い細胞が出て来るからで、こゝに於て、高等の文明國として、進むことが出来るのではないか。唯その間、或は病的の細胞、不健全なる細胞、即ち瘤とかいふ如き、細胞の混じて居ることがありはしないかといふ惧はあるが、併し、その爲に、總ての細胞の健全なる發達が妨げられて非常に劣弱になるといふことは、眞に杞憂に過ぎないのである。なぜなれば、今の學生間には、昔から見ると、高等の教育を受ける者が、ズット多くなつて居る。それで、その多數の中には、多少碌でもないものゝあるのは、疑ふべからざることである。

現代の青年は古の青年に比して懦弱なるか

三九

現代の青年は古の青年に比して懦弱なるか

三七〇

抑も青年の墮落といふことは、何れの世にもあるもので、昔各藩から選ばれて江戸に出て行つた者は、先づ十人か十五人宛しかなかつた。而してそれが皆大成したかといふと、決してさうではない。まあ一人か、三人、或時には全くないこともあつた。即ちこんな少人数の中にも、猶且襤褸屑はあつたのである。

現代青年の自覺

今日の學生は、盛んに遊戯體操をするが、その間に於て嫉妬、中傷、猜疑、陰險等のことなく、快濶なる競争の間に勝敗を決し、勝て誇ることなく、負けて怨むことなく、壯快に敵となり、味方となる、そこに修養を積んで、一種の秘訣が會得されて來る。今日、多くの學生が虚榮に驅られ、神經衰弱に陥り、中には學藝の奴隸となつて、辛うじて學校を出たかと思ふと、嫉妬、中傷、猜疑、陰險に陥る者が甚だ多い。それ故に、今日に於て、體育を獎勵するは誠に美舉である。この

一種の秘訣

現代青年の自覺

三七一

現代青年の自覺
三三二
體育の結果、必ずや吾國民は大國民の基礎を成すに相違ない。青年學生たる者、こゝに意を留めて、體操遊戲の間に、宜しくこの精神の修養を全うせんことを希望する。乃ち萬難を排して邁進するの勇氣、大事に處して動ぜざるの忍耐力をも、これを養ふことが出来るのである。世の中には、競争も必要であり、又た嫉妬も或點に於て、進歩の動機となるのであるから、これを絶対に擯斥するのではないが、唯だその争ひや、君子たることを要するので、今日はこれを事實に教へて、不知不識の間に孔子の言のやうな事柄が行へる順序が着いて居る。誠に幸福な次第である。然るに今日の學生にしてこゝに意を留めず、或は體育を等閑視する者あるは、甚だ以て吾輩の遺憾とする所である。

信念を強くせよ

或は、後藤は何時も同じ事をいふ、信愛主義は後藤の十八番である。人に對する深切、物に對する深切に決まつて居るといふ人もあらうが、これは、別に十八番といはれる程の藝當でもないけれども、自分は、唯だ誠心誠意、幾度も幾度も、これも繰返すことの必要を認めて居るのである。耶穌教の人は、何遍「アーメン」を繰返して居るか、又た念佛宗の人は、何遍「南無阿彌陀佛」を繰返して居るか、法華宗の人は、何遍「南無妙法蓮華經」を繰返して居るか。これ等の言葉は、他の宗旨

信念を強くせよ

信念を強くせよ

三七四

の者から見れば、別に面白くも有難くもない。單に幾度となく、同じ事を繰返して居るに過ぎないと思ふであらう。併しながら、點々落つる所の雨垂れも、竟に岩石に穴を穿つと同じやうに、努めて止まざれば一念天に通ずるのである。即ち知らず識らずの間に精神上の修養、慰安、慰藉、其他諸般の幸福を與へて居るのである。吾輩が、十八番と稱せらるゝ所の、同じ言を繰返して居るのも、これ矢張り同じ次第であるから、益々信念を強くして、信愛主義の中より妙味のある所を発見し、功德のある所を発見して、これを公私の間に利用することになつたならば、その従事して居る所の事業の爲めにも、又た各自の一身一家の爲めにも、必ずや幸福の種子を蒔いて、やがて美しき花を咲か

信念を強くせよ

三七五

せ實を結ばしむることが出来るのであらう。然るに、若し幾度聞いても何等の信念をも生ぜず、何等の妙味も見出し能はずとせば、その人は、論語讀みの論語知らず、寶の山に入りながら、手を空うして歸る人とならなければならぬのである。由來、かゝる信念の事は、人心の機微に屬するもので、文字にも言葉にも盡すことの出来ないものであるから、篤と考へて、信愛主義の中より微妙の味ひを探がし出して幸福を生み出さんことを、熱誠を以て切に勧告する次第である。